

正・政・清・聖・性・醒

炉ばたセイ談



平成29年秋号

巻頭言

行く川の水の流れは絶えず

中西書彦

13号をお届けします。本誌は故人来院貞子氏の提案でガリ版刷りの冊子から始まっており、6号の出版後貞子さんがお亡くなりになりました。丁度7号の原稿依頼を貞子さんから頂いて一ヶ月後のことでした。葬儀後しばらくして、原稿をどうしましょうかと重朝氏にお伺いしたら続けましょう「貞子の供養になるし、自分の元氣付けにもなる」とのことでした。そこで、桐野三郎会長の指導のもとあつと言つ間に昨年の12号までその年々の会員の想いを綴ってきました。7号では貞子さん葬儀での沢山の弔辞、略歴、発表文などを収録することが出来ました。8号では長女久子さんの貞子さんへの思いを収録、9号で貞子さん3回忌法要と「鶴瓶に乾杯」の縁で、改めて鶴瓶師匠の前座付き「錦木検校」の供養の様子などが収録されています。10号では7回に亘る入来新能のパンフレットと貞子さんの遺稿として単行本に纏められた「貞子の語る入来文書」と「茅門のある町から―貞子の徒然草」の表紙をカラーで紹介できました。11号と12号では貞子さんの町興し運動で新能を鹿児島で他所に先駆けて7回も行われた偉業を改めて振り返ってみました。また、平成28年8月の台風で倒壊した「茅門」の復元した姿も紹介できました。

さて、今年2月に桐野会長が身罷られました。また、早いもので4月末には貞子さんの7回忌法要が三男の大田導師のもと、お子さんやお孫さん達、炉ばたセイ談会員、入来新能実行委員会の皆さんなどが集まり、賑やかに行われました。その席に故桐野会長の姿が見えないのは寂しい限りでした。今年6月関係者で炉ばた庵に集まり、次期会長の人選について協議しました。その結果蒔谷繁樹氏にお願いして快諾して頂きました。同氏は本誌発足時から会員であり、本誌の発行だけでなく、重朝氏の健康や竹林などの管理などにもこの7年間協力して来られました。新会長のもと会誌の流れを尊重しながらも、時の流れも受けてより良い会誌になることを期待しております。

目次

会長就任挨拶	・ ・ ・ ・ ・	澁谷 繁樹	・ ・ ・	1
桐野三郎さんを偲んで	・ ・ ・ ・ ・			3
せいごさんを思う	・ ・ ・ ・ ・	入来院重朝	・ ・ ・	8
西南之役百四十年恩讐を越えて	・ ・ ・ ・ ・	宮下 亮善	・ ・ ・	12
『南洲翁遺訓』と荘内南洲神社 — 歴史を訪ねる旅 (8)				
	・ ・ ・	下土橋 渡	・ ・ ・	20
松ヶ岡開墾場 — 歴史を訪ねる旅 (9)				
	・ ・ ・	下土橋 渡	・ ・ ・	28
沖永良部島の南洲翁史跡 — 歴史を訪ねる旅 (10)				
	・ ・ ・	下土橋 渡	・ ・ ・	37
この頃思う事	・ ・ ・ ・ ・	十五代沈壽官	・ ・	50
師父 聖哲 巨匠 達人 泰斗	・ ・ ・ ・ ・	澁谷 繁樹	・ ・ ・	52
古代ハヤトとは何者か	・ ・ ・ ・ ・	中山とし子	・ ・ ・	56
— 神武皇后選定の段を手がかりとして —				
朝河貫一と『入来文書』と入来院貞子	・ ・	梶原 宣俊	・ ・ ・	69
平均寿命まで生きて思うこと	・ ・ ・ ・ ・	中西 喜彦	・ ・ ・	80
編集後記	・ ・ ・ ・ ・	中西・下土橋	・ ・	92

表紙：国指定史跡・清色城跡（きよしきじょうあと） 清色城は、薩摩川内市入来町浦之名にあった中世山城で入来院氏が本拠とした城。写真は入来小学校（江戸時代には入来院の地頭仮屋が置かれていた所）に上がる石段。

会長就任挨拶

—セイダンの会長なんて

ガラじゃないんだけど—



澁谷 繁樹

セイダンと関係ができたのは、入来院貞子さんから襲われた、が理由になる。

新聞社の文化部のペイペイだったころ、貞子さんは新聞社によく出入りしていた。文化関連の催しでもしよっちゅう顔を合わせたけれど、知性は屹立、弁も立つブンカオバサンだなど、あまり近づかないようにしていた。だいたいにしてからが、公にしろ酒の席にしろ、いろいろ談義は苦手で、滔々たる教養の流れには溺れてしまう。

1

敬遠しているとナゼカ向こうから近づい

てくる。大学一年生時代のスキー小屋で、ウイスキーで酔っ払った四年生の素敵な女センパイから「シブチャン、もてようと思ったらね、無視するの、知らん顔してりやにじり寄ってくるんだから。それと、相手が団体の場合は、コンパなんかだけどね、一番さえないのに優しくするの。そうしたら、一番いい女が手に入るんだな、これが」と、教えてもらったのを思い出す。

そうそう逃げ回ってばかりもいられない。たまにはおつきあいするうちに、大学の先輩だと知れた。加えて、夫君も同じ大学、しかも同じ学部の大先輩だと判明した。

十五代沈壽官氏との出会いとよく似ている。鹿児島のレストラン、顔も知らないのに論争になり、表で決着をつけようと腰をあげかけたら、氏が「ところで、はんな、大学な、どこな」と聞いてきた。「ワセダ」「おいもじ

やが、学部は「セイケイ」「じゃつとなあ」。言い争いはどこかに行つて、今日は呑んど、オウ、となつてしまつた。

入来院夫妻との場合も、先輩後輩とわかつた途端、頭があがらなくなつた。セイダンを発刊したい、ついでにはアナタも会員にするから、とテイコサンから申し渡され、新聞記者としてひとつの雑誌に所属するわけにはいかない、取材は公平が原則だからと抵抗したのに、一顧だにされず、もう決めたの、と押し通されてしまつた。

桐野三郎会長逝去を受けての新会長選びも同じだつた。髪の毛がなくなつた六十五歳にもなつて、情けないといつたらありやしなけれど、大先輩のオマエがせいとの一言に、任でもないしガラでもない抗弁を口ごもつただけで、押し切られた。

知性は薄っぺら、人格頼りなく、覚悟もフ

ラフラ、でも、一つだけは自慢できる。大先輩をはじめ会員諸氏がいずれ劣らぬ宝石ぞろいで、会長がフワフワでも、なんの心配もない。

それにね、テイコサン、そもそもはアナタが原因なんですからね、アナタに襲われなきや新会長だつて、なかつたんですから。



桐野三郎さんを偲んで



「炉ばたセイ談会」は作家・歴史家であった故人来院貞子氏（一九三三―二〇一一）が

所属する鹿児島ペンシルクラブで平成十三年に提唱、同クラブ代表の相星雅子氏ほか数名の会員がこれに賛同、他に新聞・テレビ関係者、高校・大学の教職員ほか地元の元町長などが加わっていたき、入来武家屋敷の囲炉裏辺で「セイ談」を語り合う会としてスタートしました。「セイ談」のセイは聖、清、正から醒、政、性まで、つまり話題は問わずお互いの蒙を啓こうという程度の、堅苦しくない会という意味です。（以上、桐野三郎さんが「炉ばたセイ談」9号に書かれた『炉ばたセイ談の生い立ち』より）

「炉ばたセイ談会」スタート以来代表を務めて来られた桐野三郎さんが平成二十九年二月二十六日に永眠されました。二月二十七日（月）の南日本新聞に掲載された『エッセイストの桐野三郎氏死去』と題する記事を以下に転載させて頂きます。（下）

『新聞や郷土文芸誌などで活躍したエッセイストの桐野三郎（きりの・さぶろう、本名久保四郎Ⅱくぼ・しろう）氏が26日午前0時、間質性肺炎のため、始良市の自宅で死去した。85歳。鹿児島市出身。自宅は始良市平松5122の1。通夜は27日午後7時から、葬儀・告別式は28日午前10時から、始良市西餅田3288、天国葬祭始良みそらホールで仏式で行う。喪主は妻の牧枝（まきえ）さん。

慶応大経済学部卒。山形屋勤務、パブ経営

などを経て文筆活動へ。南日本新聞では、1994〜98年エッセー「はーふたいむ」(全100回)を連載、99年新春文芸の短編小説で入選(1席)したほか、2002〜05年「読者と報道」委員会委員を務めた。鹿児島ペンシルクラブ会員、岩崎育英文化財団理事、炬ばたセイ談会代表。著書に「さらば無頼なる日々」(随筆かごしま社)』

桐野三郎さんを偲ぶ

入来院重朝

桐野三郎さんが亡くなって大分たちます。

私は三郎さんと知り合ってそんなに長い年月ではありません。会った時の印象はああさわやかな人だなあでした。つまり私にとって鹿児島に帰ってきて始めて会った知識教養人の

サンプルでした。温厚で全く申し分のない薩摩のヒトでした。

さてお葬式に行つてハタと気付きました。彼は私の知っている桐野三郎さんではありません。久保四郎さんなのでした。私がつっていたのはあくまでも桐野三郎さんです。私は本当の彼をどれだけ知っていたのか。それはわかりません。あくまでも私は桐野三郎さんを思うのです。ああもう一度一緒にビールをのみたいなあとは。(六月五日記)

シニカル紳士

澁谷 繁樹

文筆通り名の桐野三郎さんよりも本名の久保四郎さんの方がしっくり来るのは、知合ったのが桐野さんとして書き出すのはまだまだ

先の昭和五〇年代になるからだろう。

久保さんは鹿児島市高見馬場のビルでパブを開いていた。名前はマリー。かなり広い洒落た店で、若い層は踊り回ったりもできたし、そろそろ落ち着きたい年代はカウンターで静かに呑んでいた。久保さんの葬儀で顔を合わせた高校の同級生は、四郎さんから男の酒の飲み方を教えてもらったと話していたけれど、当方はシニカルそうな紳士だと敬して近づかない、に徹した。

山形屋東京担当時代に一年の交際費を一晚で使った、自腹を切りまくり膨大な借金をこさえた、噂が耳に入る度におそろおそろ真相はとうかがうと、シブヤチャン、人はとやかく言うイキモノですからね、と穏やかに笑いながらしつかりはぐらかされた。

本当はどうなんです、西の遠い世界で再質問してみるつもりではいるが、フフフと含み

笑いに包まれるだけかもしれない。

桐野三郎さんとの7年間

中西喜彦

今年の正月、華やかな花の絵と共に、もう少し車椅子の目線から世の中を楽しみたいとの年賀状をいただいた。昨年秋に炉ばたセイ談会で酸素ボンベから吸入器を付けた状態でお会した時は、あまり食事も取られなかったので心配していた。年賀状で生への期待の文章を拝見して凄く嬉しい気持ちになったことを思い出す。しかし、その約二カ月後に訃報に接しがつかりした。

桐野さんに最初にお会いしたのは故貞子さんから誘われて出席した百田陽一さんの送別会の時である。その時、今から少し入院する

ような挨拶をしておられた。以来色々病気を抱えながら飲み会では老いを感じさせないお元気な姿に接してきた。

主として炉ばたセイ談誌の編集方針でご指導頂いたが、御自身も毎年長編の投稿を続けられた。四百字詰め原稿用紙約四十枚に丁寧に手書きで書かれ一つの芸術作品の趣があった。当初数年間筆者の仕事はそれをパソコンに打込むことであつたが豊富な語彙に大変勉強になった。やり取りの中で「遅筆のものも怠けているのではなく色々と推敲しているのです」とのことに妙に納得した経験がある。

葬儀で拝見した遺影は壮年期のもので筆者の知らない久保さんだった。二中の同級生の弔辞では、亡くなられる一ヶ月程前にも最後の同窓会に、酸素ボンベを抱えて車椅子で、天文館の会場に出て来られたらしい。まさに生涯現役の壮絶な生き様をご教授頂き出会

に感謝している。心からなるご冥福をお祈りする次第です。
(炉ばたセイ談編集担当)

ワイングラスのイラスト

下土橋 渡

平成23年秋発行の第7号以来編集担当をさせてもらっていると、桐野三郎さんから毎年手書きの原稿が届きます。味わいのある文字で丁寧に書かれた直筆の原稿に直に触れられ、誰よりも一番先に読ませて頂けるわけです。大変恐縮しながらも光栄に感じたものです。

まず文章をパソコンに入力します。入力が終わると内容に沿ったイラストを挿入しながらページを整えていきます。イラストは出しやばつてはいけません。付かず離れずの塩梅で

適宜挿入していきます。

桐野三郎さんのエッセイには、ワイングラス、カクテルグラス、徳利、お猪口、ワインボトル、摩天楼、ピアニスト、ダンスサークルエット、ゴンドラといったようなイラストをたくさん使いました。会員になっている有料の素材サイトにはいろいろなイラストが準備されていて、エッセイの内容にピッタリのイラストが見つかる嬉しかったものです。

そうした楽しみや、桐野三郎さんから届いた、四百字詰め原稿用紙が30枚も40枚も入ったずっしりと重い封筒から束のような原稿をおもむろに取り出す感触はもう味わえませんが、今後の『炉ばたセイ談』の更なる発展に向けて、微力ながら頑張っ行ってきたいと思います。桐野三郎さん、ありがとうございます。心よりご冥福をお祈り致します。

(炉ばたセイ談編集担当)



在りし日の桐野三郎さん。庵主・入来院重朝さん（右）と談笑中の桐野三郎さん（平成27年9月重朝さん宅で中西喜彦さん撮影）

せいじいさんを思う



入来院重朝

先日、宮下亮善師から、西南之役一四〇年・明治維新一五〇年記念『西南之役官軍薩軍恩讐を越えて』除幕式及び式典の御案内がきました。期日は九月二十三日（祭日）です。彼が相当前から云っていましたから、いよいよやるかと私は思いました。

さて、私は参加出来るかどうかハタと思いました。と云うのは、昨今、足腰が弱っていて特にヨチヨチとしか歩けない状態の上、数ヶ月前発症した膀胱炎が完治していず、前立腺肥大のためショツ中尿意をもよおすのです。始末が悪い。夜中は一時間おきにしたくなるのです。だから、手許にしびんをおいている

のです。

そんなわけで折角の式典に参列はムリかなと思つてるところです。残念です。それはそれとして、昨今、私は明治維新についていろいろ考えていました。というのは、明治以来日本に「公儀」という言葉をきかなくなつたからです。ご公儀とはマサに江戸時代の日常を取りしきつていたコトバではないか。私たちが少年の頃から日常はマサに私儀次第であつたというおもむきが強い。何故か、武家社会がつぶれて、明治以来道徳はサマ変りしたのです。そもそも明治政府はすなはち長州政府です。政府の中枢をにぎつたのは即ちサムライ以下の分ざい、その大親分の山縣有朋がその典型です。すべて目に入るものは私物化するつまり日本国そのものを私物化したのです。

西郷さんは一体何をしていたのかと思いま

す。マカタンシと城下士からサゲスマレながら、西郷さん一党は結局当時の日本の時局の大転回をなしたとげたのです。それは何をもつてか。かの有名な「赤報隊」です。この赤報隊の活躍なくしては維新の大業はありえなかった。つまりこの「赤報隊」の生みの親は西郷さんであり、マサに暴力団の大親分であったのです。つまり西郷さん抜きでは明治維新など夢の又ユメだったのです。こうして出来あがった明治政府はさきに云った通り、長州の小ワツパ不良集団にのつとられたのです。つまり公儀のココロなどアブクの如く消しさられ、無学無教養のヤカラが、やりたい放たいをなしたとげたのがつまり明治政府でした。

これらのことは、原田伊織著の「明治維新という過ち」という著書を読むと全く感銘を一つにします。

さて、現在の日本は当然明治政府つまり明

治の世界と密接不可分につながっています。私の父も母も明治生まれでしたし、私の子供時分は西南戦争はついこの間のことの如く田原坂の死闘などは日常ウタに歌われています。すなわち「雨は降る降る人馬はぬれる。こすにこされぬ田原坂」です。日清、日露の戦争も支那事変に始まる大東亜戦争も明治維新の大仕事と密接に不可分につながっています。明治政府の夜郎自大さそれ自体が江戸時代までの日本人を一皮むいたモノでした。つまり日本人とは何かという永遠の命題なのです。長州政権がつくりあげた「明治」天皇像は四代にわたって現代の天皇まで続いています。天皇とは何かとは永遠の日本のナゾです。

さて、維新の大業をなしたとげた我らの西郷南洲は一体何をしていたのか。マサになぞで

す。そもそも西郷さんそれ自体がナゾです。そ

もそも西郷一族、それ自体全くのナゾです。

薩摩へコなどでは全くなかった。彼等は

「易断者」と幕末当時陰口されていたのです。

いわゆる普通の日本人では全くない。彼等は皆偉丈夫で、背丈は皆六尺ゆたか、堂々たるものです。大久保一蔵はユタモンの中で一人変り者でした。西郷さんがすることがなくなつてぼんやりしている間にみるみるうちに明治政権の一角を占めるに至つたのです。彼はつまり普通の日本人の秀才並みの才幹だった。西郷さんと決して仲たがひしたわけではない。西郷さんはすることもなくぼんやりしているうち彼の血の一角がうずき出したのです。つまり世間で云う「征韓論」であります。彼は大陸に勇飛せんとする血がうずき出したのです。日本での役割は彼は十分果たしたのですから、これはやむをえない。結局彼の処遇をよくするだけの大丈夫が時の政権にいなかった

たわけです。つまり普通の日本人は優等生、

秀才はたくさんいるけど、度量を比較するすべを生来持つていません。結局西郷さんは周囲から誰からも理解されず、恐らく愁然として故郷鹿児島に帰郷したのです。翌明治七年四月には江藤新平の乱で彼は即刑死です。六月に西郷私学校設立。だんだん雲行きがおおしくなります。彼がなぜ私学校をつくりたくなつたのか、恐らく淋しかったのだらうと思います。私学校とはそもそも何か、要するに彼の抱懷を誰かれにきいてもらいたい場です。彼にはファンが全国的にたくさんいます。そもそも彼のユタモン一統はこの私学校の中核であり、彼のファン賛同者が蝟集したのです。彼に一日会えば一日の愛が生じ要するに彼の存在そのものがナゾなのです。つまり彼は要監視人物ナンバーワンです。もちろん私学校生徒達は彼が政府からにらまれていることは

百も承知です。西郷さん本人がにらまれてい
るとホントに思っていたかどうかわかりませ
ん。もともと彼は政府に謀叛など起そうなど
とはこれっぽっちも思っていなかったと私は
信じています。彼はそんなチツポケな人物な
どではありません。

さて、明治九年十月熊本神風連、秋月、萩
の乱が起ります。十二月、三重、茨城に農民
一揆が起り、世情は乱であります。明治十年
正月早刺客事件、私学校党草牟田火薬庫事
件、二月二日銃砲彈藥製造所襲撃事件、同三
日西郷小根占より武村自邸へ帰る。同十五日
西郷軍出発。三月四日篠原国幹田原坂戦死。
同二十四日田原坂失陥以後人吉、宮崎、佐土
原、延岡、永井村より可愛岳包圍突破、九月
一日鹿児島に入り二十四日城山陥落、西郷以
下自刃。

さて、最後に

松浦玲の言葉を紹介します。

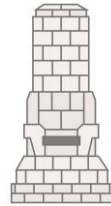
「腐敗墮落した大久保であった……。
西南戦争は、いろんな要素が混在してい
ちがいに定義しがたいけれども、という
大久保専制に対する正面からの糾弾という一
面を（西郷が）もったことはまぎれもない。
しかしその最後の戦いも西郷流であった。あ
らゆる術策を弄してでも勝とうとは思ってい
ない。百年の後に「正道」が受けつがれれば
よいと、はるかな将来に望みを託したのであ
ろう。果たして百年目、西郷評価の機運は濃
いが、それは今の政治のどこにつながって
いくのであろう。」

（六月五日記）

（炬ばたセイ談庵主）



西南之役百四十年恩讐を越えて



宮下 亮善

1

「和尚さん、僕は日本に来るにあたり、西郷隆盛と吉田松陰を勉強して来ました。」「お、それは偉いね、まさに鹿児島は西郷隆盛の生まれ在所、それならば、縁の場所を案内してあげる。」ということで、西郷洞窟、終焉の地、南洲墓地などを案内し最後に城山の西郷銅像前で国道十号を挟んで、記念写真を撮ろうとしたら、彼がきまり悪そうな様子で、西郷銅像を背景に写真を撮ろうとしない。「君は、西郷隆盛を勉強して来たと言ったろう、折角だから、記念写真を撮ってあげるから、そこに立ちなさい。」と勧めても、「いや、い

や」と言っ立とうとしない。「ああ、そうか、征韓論か」と問うたら、「そうです。韓国では、西郷隆盛のことを良く言わない。」「だから、西郷隆盛と一緒に写真を撮ったら大変なことになる。」と彼は写真を撮ることを拒否しました。

「あそうか、君がそこまで言うのであれば、言わせてもらう。なるほど君たち韓国人が西郷隆盛のことを悪くいうのは構わない。それならば君に問うけれど、日本人が君たち韓国人と接して、伊藤博文を暗殺した安重根のことを、批判する日本人は居ない、それはなぜか解るか、それぞれ立場も変われば、考えも変わる。西郷隆盛も安重根も私事の私情でもって事を行ったのではない。国の為という大義名分で身命を掛けた事を理解するから、日本人は安重根を批判しない。あの時代、日本が日清・日露戦争に負けていたら、ロシアの

植民地になっていた。それが当時の国際常識だ。あの明治維新の志士たちは、それこそ命懸けで欧米列強の植民地支配と戦い、日本の近代国家建設の礎を築いた。その先頭に立ったのが西郷隆盛だ。だからこそ、今でも西郷隆盛は多くの日本人に尊敬され、われわれ鹿児島の人間は西郷隆盛を誇りに思っている。」

「君たち韓国人が安重根を誇りに思うように、その心情は何も変わらない。」

今から十数年前、韓国の大学生K君をホストファミリーとして、二週間程生活を共にした時の事です。韓国では西郷隆盛は『征韓論』の首謀者として今でも悪者扱いをされているということ。振り返って、日本の大学生や若者達がどれほどに、西郷隆盛を理解し近現代史を学んでいるのか、鹿児島にしながら西郷隆盛がどんな人物であるのか、心もとな

い昨今です。

このK君は高校の教師として頑張っているとの手紙をもらいましたが、西郷隆盛をどのように生徒達に語るのか、およそ見当がつかず。好むと好まざるとにかかわらず、国際社会は『国民国家』です。『地球市民』という言葉を見聞きしますが、まだまだ、世界はそこまで成熟していません。郷土や国に愛着を持つことは自然な成り行きであり、郷土の偉人に誇りを持つことも大切なことです。そのことは当然ながら、排他的国家主義であってはならないものです。K君は自国の歴史を学び、その過程で『征韓論』を韓国的歴史観で、西郷隆盛や吉田松陰の存在を知り日本に興味を持ったものと思われま

す。日本人は物事を穏便に済ませようという美德があります。それこそ今流行の『付度』でもって、敢えて言うことをしない。しかし外国人との間では通用しません。その場で反論

しないと、相手の言動を暗に認めた事になります。『慰安婦』の問題、『虚構の南京虐殺』の問題、戦後七〇余年にして、未だに彼の国の外交的手駒にされている。隣国の若者達がどのような歴史観をもっているかは、知って置くべきだとおもいます。

西南之役百四十年を語るのに『征韓論』を抜きに語れません。

そもそも『征韓論』とは。――幕末にも欧米列強に対抗する外交攻略として、吉田松陰・橋本左内・勝海舟らによって征韓論が主張され、木戸孝允も中央権力を強化させる施策として征韓の実行を唱えた。明治政府は明治元年（一八六八年）十二月、対馬藩主宗氏をして王政復古を朝鮮に通告させ、中絶していた旧交を復そうとしたが、朝鮮側は書契の形式が旧例に反するという理由で拒んだ。ついで外務省の佐多白茅・森山茂・花房義質ら

が交渉に赴いたが解決しなかった。これは当時国王李熙の父大院君が国政の実権を握り、排外鎖国政策をとっていたからであった。このような韓国の排日策が明治六年に至って征韓論という大きな政治問題となった。

征韓論は留守政府の閣議に上程され、陸海の兵を韓国に出してわが居留民を保護すること、使節を派遣し韓国に直接談判させるとの議案であった。この議案に対し板垣退助は出兵論を主張した。これに対して西郷隆盛は「出兵するよりも責任のある全権使節を派遣して平和的な交渉をなし、それでも韓国が聞き入れない場合は韓国を討つのもよからうと論じ、その使節には西郷を派遣されたらと」希望した。諸参議の多くは西郷の説に賛成し、八月十七日の閣議において西郷を遣韓大使とする。ただしその発表は岩倉大使らの帰朝を待つて行うことにした。ところが岩倉大使一

行が九月帰朝すると、岩倉・大久保らは内地の整備が第一で外征は後にすべしとの理由で反対した。

征韓派、内地派の両派に迫られた太政大臣三条実美は煩悶のすえ病氣となった。これを幸いとした大久保らは『秘策』ありとして宮廷工作を實行し、岩倉右大臣に太政大臣の職務を代行させるようにした。岩倉は明治天皇に征韓論に反対する意見を奏上して勅許を得た。ここにおいて西郷隆盛・板垣退助・後藤象二郎・副島種臣の五参議は岩倉に不満をもつて下野した。

なお『明治六年政変の研究』において毛利敏彦は西郷征韓論の通説を実証的に批判し、また西郷が士族の棟梁であり士族の利害の代表者であるとする通説を批判して、西郷は朝鮮問題の解決が必要だと痛感し自ら交渉にあたって国家的懸案を解決したいと望んだので

ある、としている。――（村野守治著引用）

世にいう西郷征韓論説ではなく、『遣韓使節論』という立場が西郷の本旨であった。

独不適時情 独時情に適さず

豈聴歎笑声 豈歎笑の声を聴かんや

雪羞論戰略 羞を雪がんとして戰略を

論ずれば

忘義唱和平 義を忘れて和平を唱う

秦檜多遺類 秦檜の遺類多く

武公難再生 武公再生し難し

正邪今那定 正邪今那ぞ定まらん

後世必知清 後世必ず清を知らん

この漢詩は明治六年（一八七三年）十月に詠んだものである。廟堂の論争について、自らを武公（岳飛）になぞり、反対派を秦檜にたとえ批判している。宋に侵攻した金国と和

を結び、忠臣岳飛を死に追いやり、ついには祖国宋を滅亡させた秦檜の裏切りをたとえて、その非を諫めたものである。この朝鮮問題はどちらが正か邪か今決まるものではない。しかしながら、後の世に必ずどちらが正しかったかわかるであろう。

—文明とは、道の普く行わるるを称賛せる言にして、宮室の莊嚴、衣装の美麗、外觀の浮華を言うに非ず。世人の唱うる所、何が文明やら、何が野蛮やら些とも分からぬぞ。

予嘗て或る人と議論せしこと有り。西洋は野蛮じやと言いかば、否な文明ぞと争う。否な否な野蛮じやと畳みかけしに、何とて夫れ程に申すにやと推せしゆえ、実に文明ならば、未開の国に対しなば、慈愛を本とし、懇々説論して開明に導く可きに、左は無くして未開蒙味の国に対する程むごく残忍の事を致し、己を利するは野蛮じやと申せしかば、其の人

口をつぐみて言無かりきとて笑われける。—
西郷南洲翁の有名な『文化論』である。明治維新は欧米列強の植民地支配に対する国を挙げての抵抗運動であったといえる。

このような大きな時代背景の中、『明治六年政変』がおこる。まさに、明治政府が欧米列強に対峙する外交政策の路線闘争であり、文明観の対立であったといえる。

西郷南洲翁下野後、明治七年台湾征討を閣議決定し、同八年朝鮮西南海岸において軍艦雲揚が江華島守備兵と交戦する『江華島事件』を起こす。この報を聞いた西郷南洲翁は「朝鮮を軽蔑し応砲したことは、天理において恥ずべき所為」と批判したと言われている。明治六年の閣議において、全権使節を派遣し、自らがその使節として朝鮮国に赴き和平を意図した思いとは、おおいに反する事件であった。その結果、明治九年（一八七六年）『日朝

『修交条規』を締結する。この条約は、かつて徳川幕府が欧米列強と結んだ不平等条約そのものであった。これから後、日清・日露戦争をへて、大東亜戦争敗戦まで七〇年間の『分水嶺』が明治六年の政変であったといえる。西郷南洲翁下野後の明治政府は欧米列強の『轍』を結果として踏み行うこととなった。

御仏の 浄光明が とこしえに

護るならまし 南洲の夢

与謝野晶子が昭和四年に鉄幹とともに、南洲墓地を訪れ詠んだものである。思うに『南洲の夢』とは、「道義の普く行われる東亜の和平」ではなかったのか、今日の東アジア情勢を俯瞰するとき、その思いを深くする。『正邪、今那ぞ定まらん、後世、必ず清を知らん。』西郷南洲翁の慧眼今に光るものがある。

西南之役は、明治の近代国家建設途上における国内最後で最大の内戦である。明治六年十月、いわゆる遣韓論に敗れた西郷隆盛の下野により、その端緒を開き、明治十年二月十五日出軍、同十年九月二十四日をもって終焉した。参戦した兵力は、官軍六〇〇〇〇人、薩軍三〇〇〇〇人。両軍合わせて一四〇〇〇余人の戦死者を出した。熊本城の攻防戦、瀬高の大会戦、田原坂の大激戦などが、つとに有名である。日本人同士が、親子が、兄弟が、竹馬の友が、血涙山河を濡らす悲劇的戦いに、あまた有為の人材を失ったこと、今もなお惜しみてあまりある。

回向には 我と人とを 隔つなよ

看経はよし してもせずとも

島津家中興の祖と仰がれる日新公（島津忠

良)の『いろは歌』である。日新公の加世田別府城の戦い、島津義弘の木崎原や島津義久



西南之役錦絵。右は官軍、左は薩軍の絵

の耳川の戦いに続き、島津義弘、忠恒(のちの家久)親子は和歌山の高野山に『朝鮮之役』など、それぞれに敵味方の別なく、『高麗陣敵味方戦死者供養碑』を建立し、戦没者を懇ろに供養した。両軍相對峙した必死の戦いも、互いの奮闘をたたえ、戦没者を敵味方の別なく供養する『博愛慈悲』の精神は、武士道の精華として、感銘を与えている。

明治維新をともしに成し遂げた薩摩人同士が、刺し違ふ悲惨な戦いは遺恨深きものがある。時あたかも、西南之役百四十年にして、南洲翁眠る南洲墓地に『西南之役官軍薩軍恩讐を越えて』の供養塔が建立される。

西郷南洲翁の曾孫西郷吉太郎氏は「恩讐を克服する機会になれば」と。また、大久保甲東翁の曾孫大久保利泰氏は「歴史として捉えるのに、百年以上の月日が必要だったと思う」と話している。当日、このお二人は揃って参

列され、除幕のテープを引き、挨拶をしてい
ただくことになっている。

討つ人も 討たるる人も 味けなや

同じ御国の 人と思へば

勝 海舟

怨を以て怨に報ゆれば、怨は止まず
徳を以て怨に報ゆれば、怨は即ち尽く

最澄

嗚呼！！ 明治十年九月二十四日 秋風巨
星落つ城山 松に古今の色なし
明治十一年五月十四日 大久保利通、島田
一郎等の凶刃に倒れる。

(天台宗大雄山 南泉院住職)



南洲墓地に建立された『西南之役官軍薩軍恩讐を越えて』の供養塔
(平成 29 年 9 月 23 日に除幕)

『南洲翁遺訓』と庄内南洲神社

— 歴史を訪ねる旅 (8) —

下土橋 渡



鹿兒島県内に生まれ育ち、鹿兒島市内にある銅像や城山の洞窟、終焉の地なども見て知っていて、西郷隆盛という名は子供の頃からたいへん馴染み深いものでした。鹿兒島県人にとっていわゆる『おいどんが西郷どん』というわけなのですが、恥ずかしながら、西郷隆盛の言葉をまとめた『南洲翁遺訓』という一冊の本があり、明治維新から一五〇年を経た現在でも自費出版され、全国に配布され続けていること、しかも、その本を出版し配布しているのが鹿兒島の人たちではなく、山形県酒田市にある『庄内南洲会』の人たちだとい

うことを知ったのは、五〇歳を過ぎてからのことでした。そして、酒田市に南洲神社があることも驚きでした。

庄内藩（今でいう山形県鶴岡市、酒田市）の藩主や藩士たちは、戊辰戦争の戦後処理で西郷隆盛の下した処置が温情ある極めて寛大ものだったことに感じ入り、西郷に教えを請うようになり、やがてその教えを一冊の本に編集して出版し、全国に配り歩き始めたのでした。

『南洲翁遺訓』の地に行ってみよう。その憧憬の地、山形県庄内をはじめ訪ねたのは二〇一〇年三月のことでした。

一、戊辰戦争

庄内藩主酒井家は、徳川幕府の三河以来の譜代の名門で、酒井家にとって徳川家は長い間恩を受けた主家にあたります。そのため、慶応三年（一八六七年）、幕府の命によって江

戸薩摩藩邸を焼き打ちし、その後の戊辰戦争では、東北諸藩とともに官軍に対して最後まで頑強に抵抗しました。しかし、西郷の率いる官軍の前に東北諸藩は次々に落ち、明治元年（一八六八年）九月二十六日庄内藩も大勢を察してついに恭順、そのとき庄内藩の降伏の申し出を受けたのは新政府軍参謀・黒田清隆でした。鶴岡市役所の前にかつて庄内藩の藩校だった致道館ちどうくわんがあります。現在は、表御門、聖廟、講堂、御居間などが残っており、国指定史跡として一般公開されています。この致道館の奥まったところに、藩主が昇校の際に御入りになった御居間という部屋があって、庄内藩は、明治元年黒田清隆をこの部屋に迎え入れました。

新政府軍に最後まで執拗に抵抗した藩でしたから、庄内藩の藩主や藩士らは嚴重な処罰が下るものと覚悟していました。ところが、

黒田から告げられたのは案に相違して極めて寛大ものでした。十一代藩主・酒井忠篤は謹慎を命じられ、新政府に反逆したとして改易に処せられたものの、弟の忠玉が藩主となり、十七万石から十二万石に減封された上で庄内藩は存続を許されました。ともに列藩同盟の盟主であった会津藩が解体と流刑となったのとは対照的に、庄内藩は軽い処分です。

二、『南洲翁遺訓』

庄内藩に対するこの寛大な処置のすべては実は、戦況視察のために来庄した西郷隆盛が予め黒田参謀に指示していたものでした。のちにこのことを知った庄内の人々は西郷の大徳に心から敬慕することになります。

明治二年に罪を許された酒井忠篤公は、明治三年（一八七〇年）十一月、藩士七十余名と共に遠路鹿児島に赴き、約半年間西郷を始



致道館（山形県鶴岡市）の扁額『敬天愛人』（昭和2年3月、旧庄内藩主酒井家16代・酒井忠良書）



御居間（致道館） 藩主が昇校の際に御入りになった部屋。戊辰戦争で降伏した庄内藩が官軍参謀黒田清隆を迎えて謝罪したゆかりの部屋です。

めとして篠原國幹、桐野利秋、村田新八等の指導を受けました。

庄内の俊傑の士、旧庄内藩中老・菅実秀すげまひで(臥牛)翁が初めて西郷と面談したのは明治四年四月頃のことでした。庄内の人々は、西郷が東京にいる時はもちろん、鹿児島に引き上げた後は、遠く鹿児島まで一ヶ月余の日時を費やして教えを受けに行きました。教えを受けた人々はその教えを丹念に筆記して庄内に持



『南洲翁遺訓』(財) 荘内南洲会
平成16年4月1日第3版発行

ち帰り、それを待っていた人々はまたそれを書写して、自分の心のよりどころとして学びました。これらの書写本が後日『南洲翁遺訓』編纂の資料となりました。

明治十年(一八七七年)九月二十四日朝、西郷隆盛が城山の下、岩崎谷で没したことを知った庄内の人たちの悲しみは言語に絶するものでした。

明治二十二年(一八八九年)二月十一日、大日本帝国憲法発布に伴う大赦で西郷の賊名が除かれ、加えて正三位が追贈されました。歓喜にわいた庄内の人々が、今こそ西郷の偉大な仁徳とその眞精神を天下に示し後世に伝える時と考えて着手したのが『南洲翁遺訓』の刊行でした。

明治二十三年(一八九〇年)一月に刊行されるやいなや、酒井忠篤公は同年四月に、伊藤孝継、田口正次を、東京を中心に、三矢藤

太郎、朝岡良高は中国地方から九州に、富田利騰、石川静正は北陸から北海道にと、全国の心ある人々に配布させました。文字通り風呂敷を背負って、全国を行脚しての弘布でした。(以上、『南洲翁遺訓』(第三版)を参考)

『南洲翁遺訓』は遺訓四十一条、追加の二条、その他の問答と補遺から成ります。

著者が小学生だった昭和三〇年(一九五五年)代、小学校の卒業記念に、身の丈の二倍以上もある孟宗竹に、先人の有名な言葉などを彫り込んだものをつくるのが流行っていました。著者が彫り込んだのは、『人を相手にせず、天を相手にせよ。』という言葉でした。小学生的分際で、よくも『人を相手にせず』云々などと、その制作作品を目にするたびに大いに恐縮したのですが、実はこの言葉は『南洲翁遺訓』の第二十五条に出てくる言葉だったのです。

人を相手にせず、天を相手にせよ。天を相手にして、己を尽くし人を咎(とが)めず、我が誠の足らざるを尋(たず)ぬべし。

三、庄内南洲会と南洲神社

(一)西郷南洲先生の大徳の顕揚、(二)『南洲翁遺訓』の講究と弘布、(三)社会風教作興への貢献を願いとして、昭和五十年(一九七五年)九月、財団法人庄内南洲会が設立されました。

そして、翌年の昭和五十一年六月に酒田市飯盛山下に南洲神社が創建されました。伊勢神宮から用材の払い下げを受けた総檜造り、銅板葺の神殿となっています。『南洲翁遺訓』

(第三版)に『東北の一角、此の酒田の地に、西郷・菅岡先生の御霊を鎮座し、朝夕拝する夢が実現した事は、言語に盡くせぬ感激である』



(財) 荘内南洲会によって昭和 51 年 (1976 年) に創建された南洲神社。酒田市飯盛山下にあります。上下写真とも、2010 年 3 月撮影。



南洲翁と菅臥牛翁が対話している『徳の交わり』像。鹿児島市武町の西郷屋敷跡にあるものと同じものが平成 13 年 (2000 年) に建立されました。



西郷隆盛直筆の書展示室と（財）荘内南洲会理事長の水野貞吉さん。
2017年6月荘内南洲神社で撮影。



荘内南洲神社のパンフレット、年4回発行の機関誌『敬天』
2017年6月荘内南洲神社で撮影。

— 西郷隆盛(南洲)翁の肖像画 —



2017年6月 荘内南洲神社で撮影

寄贈者：
石川新氏（石川静正の曾孫）
平成25年11月21日

この肖像画は、荘内藩士・石川静正（1848～1925）によって描かれたものの複製（写真）である。石川静正は、明治3年に約5ヶ月半、明治8年に約20日間、訪鹿滞在し西郷南洲翁の教を得ており、明治8年訪鹿時に描かれたものである。西郷南洲翁の『武屋敷』の写生も行っており、画人としても著名である。（写真・文とも荘内南洲神社）

りました。』とあります。

南洲神社は、（財）荘内南洲会により、南洲会館、南洲文庫と共に運営され、南洲翁に関する遺墨、遺品、研究資料を始め、明治維新関連資料や庄内出身の偉人傑士の書画などを数多く収蔵しています。（財）荘内南洲会は現在会員が約四五〇名。『南洲翁遺訓』をはじめ、論語や人間の道を求めた古聖賢の教えなどを学ぶ『人間学講座』の開催（毎月第二土曜日の午後二時より四時まで）、機関紙『敬天』の年四回の発行、西郷南洲翁の生まれた鹿児島、活躍した薩摩、流島された島々、西南戦争の舞台となった熊本・人吉・都城・城山等々を中心に訪ねる旅などの活動が現在も続けられています。

（元九州職業能力開発大学校教授）

松ヶ岡開墾場

― 歴史を訪ねる旅 (9) ―



下土橋 渡

庄内藩（今でいう山形県鶴岡市、酒田市）の藩主や藩士たちは、戊辰戦争ぼしんの戦後処理で西郷隆盛の下した処置が温情ある極めて寛大なものだったことに感じ入り、西郷に教えを請うようになり、やがてその教えを『南洲翁遺訓』という一冊の本に編集して出版し、全国に配り歩き始めました。そして、後年財団法人庄内南洲会が設立され、酒田市に南洲神社が創建されました。

一方、鶴岡市は、愛読した時代小説家・藤沢周平さん（一九二七〜一九九七年）の出身地です。南洲神社とともに藤沢文学の面影を

鶴岡を訪ねたいという長年の夢を叶えるべく初めて庄内を訪れたのは、二〇一〇年三月末のことでした。山形市内でレンタカーを借りて、妻と二人連れの山形市内から庄内への日帰りドライブは、県内陸部と庄内地方を結ぶ月山道路がつさんを通ります。道路沿いは積雪を残したままでした。車窓から遠望する鳥海山、裸木のケヤキ並木が独自の風景をつくっていた酒田の山居倉庫、南洲神社、藤沢小説の舞台を彷彿とさせる鶴ヶ岡城跡、質実剛健な教育文化を今に伝える庄内藩校致道館ちどうかんなど、有意義な庄内巡りでした。

しかし、そのとき、鶴岡市内にある『松ヶ岡開墾場』の存在をまだ知らなかったのです。知ったのは、それから二年後の二〇一二年二月に、縁あって、元世界銀行副総裁・西水美恵子さん（イギリス領ヴァージン諸島在留）の『庄内憧憬 歴史が醸し出すオーラの漂う

場所』と題するエッセイ（出羽庄内地域文化情報誌二〇一一年九月号）を読ませて頂いてのことでした。そして、今年（二〇一七年）六月に念願だった『松ヶ岡開墾場』の訪問を果たしました。

明治維新ののち、明治七年（一八七四年）になると、西日本を中心に相次いで不平土族の反乱が起きます。明治七年の佐賀の乱、明治九年の熊本神風連の乱、福岡秋月の乱、山口萩の乱、そして、最大規模の土族反乱として明治十年（一八七七年）に西南の役が起きます。こうした反乱と対照的だったのが旧庄内藩の取り組みでした。

戊辰戦争に敗れた庄内藩の復興において中心的な働きをした旧藩中老・菅実秀（すけみねひで号を臥牛という）は、明治維新直後の廃藩置県の折、旧庄内藩士の先行きを考え、養蚕によって日本の近代化を進め、庄内の再建を行うべ

く開墾事業に着手するのですが、実はこれは西郷隆盛の勧めによるものでした。

一、南洲翁と菅臥牛翁

西郷の厚遇によって藩の危機がすぐわれたとたいへん感動した菅実秀は、以後西郷に師事、西郷の指導を仰ぎながら、敗戦後の庄内藩の再建を進めて行くことになります。西郷もまた、自分を頼ってくる庄内藩の人々の心事に感じ入り、その復興を助けました。

酒井忠篤公は、明治三年（一八七〇年）十一月、菅の勧めにより、藩士七十余名を率いて鹿児島を訪れ、約半年滞在し、親しく西郷の教えを受け、寝食を共にしました。そして、翌四年、菅自身も上京し、西郷との初めての会見を果たします。菅は西郷より二歳年下。まるで古くからの友人のように互いに喜び合っている、その様子は『敬すること兄のごとく、親しむこと弟のごとき』であったといひます。



菅臥牛翁（菅実秀）



南洲翁（西郷隆盛）

鹿児島市武町の西郷屋敷跡と酒田市の南洲神社には、二人が対話している座像『徳の交わり』像が建てられています。



刀を鉤にかえて — 松ヶ岡開墾記念館（1番蚕室）の展示パネル

こうして西郷南洲翁と菅臥牛翁の交情が深ま
つていきました。

これが縁で後年、鹿児島市と鶴岡市は兄弟
都市の盟約を結び、親善使節団の相互訪問、
兄弟校の提携、中学生親善使節団の相互派遣、
青年国内研修生の交流などが現在も続けられ
ています。

二、松ヶ岡開墾場

明治四年（一八七一）に廃藩を迎え、庄内
藩は、大泉県そして酒田県となりました（そ
の後、明治九年に山形県に編入）。酒田県権大
参事となった菅実秀は、庄内藩の存続に力を
寄せた西郷隆盛にもはかり、家禄の減少で生
活に困窮する旧藩士族の救済や殖産を目的と
して、鶴岡東郊で大規模な開墾事業を計画し
ました。

明治五年四月、手始めに旧藩士三六〇人を
六組に編成して鶴岡東郊の荒蕪地三万坪を一

か月余りで開墾。その後、月山山麓後田村の
広大な山林の開墾をねらい、旧藩士卒約三、
〇〇〇人を三四組に編成し、八月から一〇〇
余町歩の開墾に着手しました。士卒は銃・刀
を鍬に持ちかえ、苦勞のすえわずか五十八日
余で全域の竣工を迎えましたが、困難を伴う
作業の中で脱落する者も少なくなかったとい
われます。開墾の本部として、開墾地内に藤
島村の旧本陣の建物を移築し、松ヶ岡本陣と
呼んで、集会所・事務所としました。明治六
年からは茶の栽培・桑園開発をはじめるとと
もに、さらに二〇四町歩に及ぶ広大な山林荒
蕪地の開墾をなすとげ、開墾は軌道に乗りは
じめます。

明治七年末からは蚕室の建設にとりかか
り、明治八年四月、鶴岡城の屋根瓦を運搬し
て上州方式の三階建て蚕室四棟が完成。明治
九年には、同様の構造の蚕室四棟を新築して



国指定史跡・松ヶ岡開墾場。建物は庄内農具館（４番蚕室）



松ヶ岡開墾記念館（１番蚕室）の前では、ダリアの植え付け準備中でした。その奥は、おカニコさまの蔵（３番蚕室）。

製糸を開始、さらに旧藩厩舎古材を利用して蚕室二棟を建設しました。その後明治二十年（一八八七）に製糸工場を鶴岡に創設して本格的な生糸生産も起こしました。

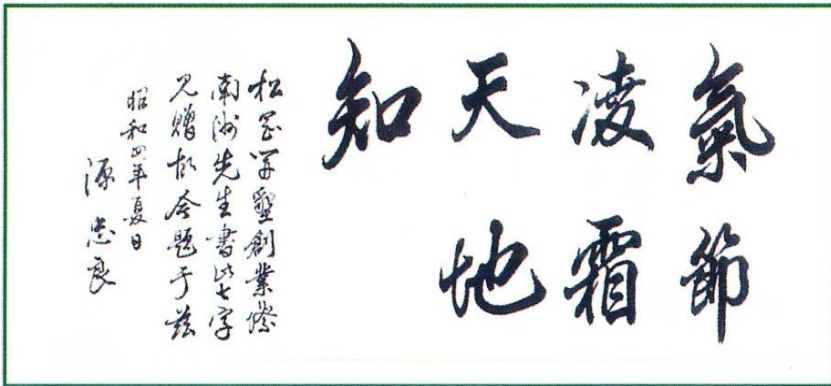
松ヶ岡開墾場は、明治初年において北海道開拓とならんで行われた土族授産・殖産のための開拓の遺跡としての歴史的重要性の高さから、平成元年（一九八九年）八月、国の史跡名勝天然記念物に指定されました。今日なお、開墾当初の土地所有・利用形態の遺制も残し、なかでも開墾中心部には、東西方向二列に配置された三階建ての一番く五番蚕室、本陣、蚕業稻荷神社などの建物が明治初年の面影そのままに開墾当時の雰囲気をも今にとどめています。（以上、国指定文化財等データベース（文化庁）を参考）

現存する五棟の蚕室は現在、一番蚕室が修復されて松ヶ岡開墾記念館となっているほか、

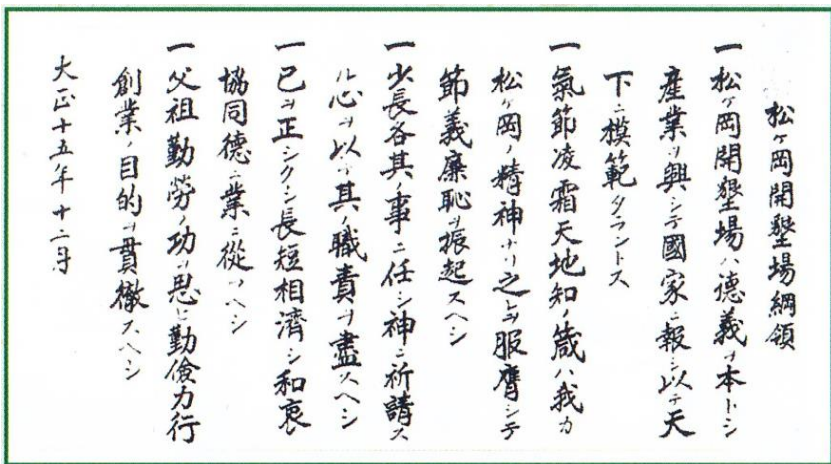
庄内農具館（四番蚕室）、おカイコさまの蔵（三番蚕室）、庄内映画村資料館（五番蚕室）などとして利用されています。

三、『気節凌霜天地知』

明治三年（一八七〇年）に酒井忠篤公とともに鹿児島を訪ね南洲翁に教えを受けた旧庄内藩士七十六名もその後開墾に従事し、また明治三年以後八年十月までの間、東京あるいは鹿児島において直接南洲翁の教えを受けた三〇余名の旧藩士もまた松ヶ岡開墾の幹部でした。明治七年十一月に松ヶ岡開墾の幹部二名が鹿児島に赴いて教えを受けた時、開墾士一同に対する箴言（教訓の意味をもつ短い言葉）の揮毫をお願いしたところ、南洲翁は、『気節凌霜天地知』の七文字を書き与えました。『困難に直面しても、それを凌ぐ強い心意気、意志があれば、天は見ている。必ず苦勞に、こたえてくれるものである。』という意味



『気節凌霜天地知』（きせつりょうそうてんちしる） 明治7年11月に西郷隆盛が開墾士に与えた箴言（困難辛苦に遭遇したときにもそれを凌ぎぬく強い心を以て取り組めば天地の神も之を知り応えてくれる）。旧庄内藩酒井家 第16代酒井忠良書。（松ヶ岡開墾記念館パンフレットより）



大正15年12月に掲げられた松ヶ岡開墾場綱領 2番目に、『気節凌霜天地知』の箴（いましめ）は我が松ヶ岡の精神である。心にとどめて忘れることなく、節度を守って正義を重んじ恥を知る心で奮起すべきであるとあります。（松ヶ岡開墾記念館パンフレットより）



庄内映画村資料館（5番蚕室）



松ヶ岡本陣。藤島村にあった旧本陣の建物を松ヶ岡開墾場内に移築した。集会所・事務所として使われました。

で、松ヶ岡開墾事業の精神となりました。

後年、松ヶ岡開墾場綱領に取り入れられ、その第二条に、『氣節凌霜天地知の箴（いましめの言葉）は我が松ヶ岡の精神なり、之を服膺（心にとどめて忘れず行うこと）して節義廉恥（節度を守って正義を重んじ恥を知る心）を振起すべし。』とあります。

現在でも、毎年四月に開催される開墾記念日には、旧庄内藩主・酒井忠篤公と松ヶ岡開墾の志を支えた西郷隆盛、開墾開拓に取り組んだ重臣の菅実秀の肖像額を飾り、床の間には西郷隆盛より頂いた『氣節凌霜天地知』の箴言の掛字を掲げて式典が催されるそうです。

— 補遺 —

開墾地といえば、鹿児島市中心部から北へ約十キロメートルの、吉野台地の高所に位置する寺山に東郷平八郎の筆による『南洲翁開

墾地の碑』があります。遣韓使節をめぐる政争に敗れて帰郷して二年後の明治八年（一八七五年）、西郷隆盛もまたこの地に吉野開墾社を設立し、元陸軍教導団の生徒一五〇名とともに開墾事業を始めました。西郷自身も武村の自邸からせつせと通い、生徒たちとともに歎をもちました。昼は農業、夜は学問に励むこの学校は、三十九ヘクタールという広大な土地を開墾し、事業は軌道にのったかに見えました。ところが時代の波は、西郷の意志に反して、西郷を大乱の首魁へとまつりあげました。自ら農夫となつて土族の将来をひらこうとした西郷の夢も西南の役の敗北とともについでたのでした。庄内の人々に松ヶ岡開墾を勧め、『氣節凌霜天地知』の箴言を贈つた西郷の開墾の夢もまた『松ヶ岡開墾場』と同様のものだったに違いありません。

（元九州職業能力開発大学校教授）

沖永良部島の南洲翁史跡

— 歴史を訪ねる旅 (10) —



下土橋 渡

戊辰戦争ぼしんの戦後処理で西郷隆盛の下した処置が温情ある極めて寛大ものだったことに感じ入った庄内（現在の山形県鶴岡市、酒田市）の人たちは、後年、財団法人庄内南洲会を設立し、昭和五十一年（一九七六年）に酒田市内に庄内南洲神社を創建しました。その神社を七年振りに再訪したのは、今年（二〇一七年）六月初めのことでした。

その旅から帰ってしばらくしてインターネットで庄内南洲神社のことを調べていると、庄内南洲会の会員の方のブログが目に入りました。今、庄内南洲神社の境内に鹿児島県沖

永良部島特産の『えらぶゆり』がまるで楽園のように咲き誇っているというのです。沖永良部島の和泊町から贈られたゆりが庄内南洲神社の境内に植えられていたのです。

沖永良部島（鹿児島県大島郡）は幕末、薩摩藩主島津久光の逆鱗に触れた西郷隆盛が流刑された島です。西郷は一年六ヶ月を囚人として沖永良部島で暮らしますが、昼夜囲いのある牢屋に閉じ込められた過酷な生活の中で体得したのが『敬天愛人』の思想だといわれます。沖永良部島は『敬天愛人』発祥の島なわけです。和泊町には、南洲翁の遺徳を慕って、上陸地や謫居たらしまの地に記念碑、西郷南洲記念館、南洲神社が建立されています。

そのような誼よしみによって、山形県酒田市の庄内南洲会と沖永良部島の和泊西郷南洲顕正会との間で交流が続けられています。今年の二月には、庄内南洲会の会員二十五名が沖永良

部島を訪れて、南洲神社、西郷南洲記念館、知名町の昇竜洞などを訪問し、和泊西郷南洲顕彰会の会員らと交流を行いました。

これに対して、六月に今度は、和泊西郷南洲顕正会のメンバーが酒田市を訪れ、歓迎交流会が催されました。沖永良部民謡『えらぶゆりの花』や『サイサイ節』、薩摩琵琶『西郷隆盛』、詩吟『獄中感有り』、伝統芸能『酒田獅子舞』などが披露され、来年のNHK大河ドラマが『西郷どん』ということもあって大変盛り上がったそうです。

沖永良部島には十一年前に一度行ったことがあります、そのときは仕事での訪島だったので南洲翁史跡巡りはできませんでした。そこで、今回七月、意を決して沖永良部島への再訪を果たしました。

一、西郷隆盛上陸の地

西郷は最初徳之島に流されますが、二ヶ月

余りのち、さらに沖永良部島へ島送りとなりました。西郷を乗せた船は、文久二年（一八六二年）八月十四日朝、徳之島の井之川を出帆、その日の午後、沖永良部島伊延港に到着しましたが、予告がなかったため、誰も出迎える者はいませんでした。護送役の徳之島東間切の横目が代官・黒葛原源助に命令書を書いて、はじめて西郷の沖永良部島遠島の間が知れます。命令書には、『着島の上は必ず囲いの中に入れて、絶対に外に出してはいけない。』と書いてありました。今までも遠島罪人はたくさん送られて来ましたが、囲いに入れなければならぬ重罪人は初めてでした。代官は牢屋を与人役所隣に早急に建設するように手配し、十六日急造の牢屋が竣工しました。牢屋が完成するまでの二日間を西郷は船牢で過ごします。西郷隆盛二十六歳のときでした。

牢屋が出来上って、代官・黒葛原源助、付



記念碑の回りにはアダンの実が真っ赤に熟れていました。



西郷隆盛上陸の地記念碑（沖永良部島、和泊町伊延港）

役・福山清蔵、間切横目(警備の警察官)・土持政照らが伊延港まで出迎えに行き、乗馬をすすめますが、西郷は『いや私は牢に入る身、もう二度と土を踏むことはないと思うので、どうか歩かせて欲しい。』と切に徒歩を願い、牢屋のある和泊まで四キロの山道を歩きました。

伊延港には、『西郷隆盛上陸の地』の記念碑が建てられています。碑の周囲にはアダンの実が真っ赤に熟れていて、いかにも奄美諸島の島らしい雰囲気を醸し出していました。

二、西郷南洲翁謫居の地

和泊に着くと、酒肴の準備がしてありましたが、西郷はそれを固辞し、自ら牢屋に入り、牢番に『錠はおろしたか』と念を押したそうです。牢屋の広さは一間半角(二坪余り)で、四寸角材の格子囲みで戸もなければ壁もなく、牢内には便所・小炉・板屏風があるだけで甚

だ狭隘なものでした。沖永良部島といえ、本土よりも沖繩に近く、高温多湿で非常に雨量も多い島。吹きざらし、雨ざらしに等しい牢屋での生活は、まさに西郷に死ねよと言わんばかりの処罰でした。牢中の西郷は、湯水を求めず、煙草を断ち、朝だけ牢番に飯を炊かせ、昼と夜の二食は、冷飯をお湯で温めて食し、牢中に静座して、読書、沈黙想の毎日を過しました。

文久二年(一八六二年)二月に奄美大島潜居から鹿児島に戻った西郷は、島津久光に召されますが、久光の上洛計画に対して、久光が無官で斉彬ほどの人望が無いことを理由に反対し、面と向かって『地ゴロ』(田舎者)なので上洛周旋は無理だといって、久光の不興を買ったと伝えられています。それが事実だとすれば、家臣の忠義に反した自らの行為を深く反省していたに違いありません。幼少時



西郷隆盛流謫の地に再現された牢屋、右に『敬天愛人』発祥地の記念碑



静座して沈思黙想中の西郷隆盛。恰幅の良い翁の面影はありません。

から郷中教育で鍛錬を積んできた藩士の心意気をもつて、獄中で端然と座禅を組んだのでしよう。その様子を見て間切横目の土持政照が拍子木を持ってきて、用のあるときはこれを打つようにすすめましたが、一度も討つことはなかったそうです。

三、土持政照

しかし、西郷とて生身の人間。このような生活が続いたため、髪は乱れ、ひげは伸び、日一日と衰弱するばかりでした。日に日に衰える西郷を見廻った政照は、牢死の恐れを感じ、対策を思案します。命令書に書かれている『圜入』の二文字から、座敷牢への改築を思いつきました。早速、代官の許可を得て、自費で牢改築に着手しました。牢が出来上がるまでの間、西郷は福山清蔵預かりとし、土持家で謹慎することになりました。政照は西郷をできるだけ牢外で過ごさせるために、こ

とさら建築を遅延させ、二十余日にして工事をようやく終了させました。その間、政照とその母ツルは、この機会に西郷の健康を回復させたいと思い、真心こめてもてなしました。西郷は、土持政照とその家族との交流の中で健康を回復し、次第に落ちつきを取り戻していきました。不遇の身に土持一家の温情は一入身に沁みただけでしょう、西郷は政照と義兄弟の契りを結び、その交誼は終始途絶えることがなかったといわれます（土持政照は西郷より六歳年下でした）。二人の交誼がいかに深いものであったかを物語る漢詩が、西郷南洲翁謫居の地に建てられた土持政照翁の胸像の碑に刻まれています。元治元年（一八六四年）二月、西郷が沖永良部から鹿児島へ帰ることになったときに、政照との別れを詠んだ漢詩です。

留別政照子

別離如夢又如雲、

欲去還來淚汨汨

獄裡仁恩謝無語

遠凌波浪瘦思君

(訳) 君と別れなければならぬことになったが、思えば夢のようでもあり、また雲のようでもあって、立ち去ろうとしてはまた立ちかえって来て、別離を悲しむ涙が止めどもなく流れ出る。顧みれば、長い間の牢獄生活中の君のなさけ深い恩義は、何とお礼を言ってもいやら適切な言葉がない。今遠い浪路を越えて鹿児島に帰って行ったら、夜も昼も君を思い慕って、ただやせにやせていく事であろう。

さて、新しい牢屋に移ると操坦勁、沖利経、鎌田宗円、矢野忠正、市来惟信、町田順円、



『西郷隆盛流滴の地』に建てられている土持政照(右)と操坦勁(左)の胸像

沖緝賢等の弟子たちが牢外に座つて教えを受
けました。西郷が島を離れる頃には塾生の数
は二〇名程になつていたといわれます。西郷
の高潔偉大な人格は、これらの少年たちに大
きな感動を与え、後に成人して島の指導者と
なり、敬天愛人の精神をうけついで、島の振
興発展に大きく貢献しました。

塾生の一人、操坦勁の祖父は琉球へ渡つて
唐語を習得し、鹿児島で医学を修めた当時の
島の代表的知識人だったので、操家には多く
の蔵書がありました。西郷はこの蔵書を借り
て読書に没頭したといわれます。沖永良部島
で西郷が読んだ本は、論語、孟子、大学、中
庸、莊子、韓非子、史記、陶淵明全集、近思
録、洗心洞筭記(大塩平八郎)、嚶鳴館遺草(細
井平洲)、言志録(佐藤一斎)など、極めて多
岐にわたつたといわれています。佐藤一斎の
言志録などは、一一三三箇条ある言葉の中か

ら特に感動した 一〇一箇条を選んで書き写
し、自分だけの『言志四録』(南洲手抄言志録
一〇一箇条)をつくつて人生のいましめにし、
西南の役で城山において自刃するまで肌身離
さず身につけていたといわれます。

四、川口雪篷との出会い

西郷隆盛が沖永良部島流謫中、同じく沖永
良部島に島流しになつていた川口雪篷(せっぽう)という
人がいました。陽明学を深く研究した人で、
詩や書の達人でしたが、とにかく大変な酒好
きでした。島津久光の写字生を勤めていたあ
るとき、酒をかうお金が無くなり、久光の大
事な書物を質に入れて、その金で焼酎を飲ん
でいたことが露見して沖永良部島に流されま
した(一説には、罪人ではなかったけれど、
わざわざ沖永良部島に住まって西郷の書や詩
作の指導をしたとする説もあるそうです)。

土持政照が雪篷に会つたある日のこと、

『大島吉之助という人が島流しになって和泊の牢屋に入っているそうだが、ぜひ会って慰めたい。自分を紹介してくれ』といわれます。西郷に話すと大変喜び、そんな人ならぜひ会いたいといい、早速雪篷は西郷に会いに行きました。二人は初対面から大いに意気投合し、雪篷は自分が住む西原から四キロ弱離れた和泊の西郷の座敷牢まで毎日のように通っては、時世を論じ学問を語り、書や詩作を教えるようになりました。

西郷より少し遅れて鹿児島に帰った雪篷は西郷邸に飄然と現れてそのまま西郷家に住みつき、留守居役を果たすとともに、西郷の子弟の書や漢学の師ともなりました。西郷亡き後は西郷家の家族を守り、明治二十二年（一八八九年）に大日本帝国憲法発布に伴う大赦で西郷の名誉が回復されたことを見届けるように、翌年病没しました。

五、社会法

山形県酒田市にある荘内南洲神社に、西郷隆盛が土持政照に与えたという巻物六巻が陳列されていて、『その中の一卷は社会法といつて備荒貯蓄を教えたものである。』とあります。元治元年（一八六四年）一月頃になって赦免召還の噂が流れてくると、『与人役大躰』『間切横目大躰』を書いて島役人のための心得とさせ、社会設立の文書を作つて政照に与え、飢饉に備えさせました。

沖永良部島は台風・日照りなど自然災害が多いところです。しかも絶海の孤島ですので、災害が起きると自力で立ち直る以外に方法がありません。そのことを知つた西郷は『社会趣意書』を書いて政照に与えたのです。社会はもともと朱熹（中国南宋の儒学者）の建議で始められたもので、飢饉などに備えて村民が穀物や金などを備蓄し、相互共済するもの



西郷隆盛が土持政照に書き与えた『巻物六卷』（荘内南洲神社蔵）



西郷公御筆『與人間切横目大駄』（荘内南洲神社蔵）

で、江戸時代前期の朱子学者・山崎闇斎がこの制度の普及に努めて農村で広く行われていました。若い頃から朱子学を学び、また郡方であった西郷は職務からして、この制度に詳しくあったのでしよう。

この西郷の『社会趣意書』は土持が与人となった後の明治三年（一八七〇年）に実行にうつされ、沖永良部社会倉が作られました。この社会倉は明治三十二年（一八九九年）に解散するまで続けられ、明治中期には二万円もの余剰金が出るほどになったといえます。この間、飢饉時の救恤の他に、貧窮者の援助、病院の建設、学資の援助など、島内の多くの人々の役に立ちました。解散時には、千五百円が『西郷隆盛謫居之地』の記念碑と『南洲文庫』を建てる費用に、五百円が『土持政照翁彰徳碑』を建てる費用に寄付され、残りが和泊村と知名村に半分ずつ分けられ、両村の大事な

基金になりました。明治三十五年（一九〇二年）に、矢野恒太による日本最初の本格的相互会社（第一生命保険相互会社）が誕生しますが、沖永良部社会倉はそれより三〇年余り早くできた協同組合、相互組織でした。

六、南洲神社

南洲神社は、西郷南洲翁を慕う島民たちによつて明治三十五年（一九〇三年）に和泊（和泊町手々知名）に建立されました。建てられた場所は『前問殿内屋敷跡』という史跡内で、敷地内には向かつて右側に南洲神社、左手には招魂社があり、南洲文庫跡の碑もあります。史跡の説明板につきのようにあります。

『明治十三年（十五年）、沖永良部島が十二区、六区分された時の戸長、町田実矩（町田精男の先祖）生誕の地である。実矩は操垣勁らと共に流謫中の西郷隆盛から教育を受けた



南洲神社（沖永良部島、和泊町手々知名）右端に南洲文庫跡の碑も見えます。



猟犬をつれた西郷像（沖永良部島、南洲神社）

少年二〇人の中の一人である。父左右悦は、与人沖蘇延良らと共に、西郷の談話の相手をつとめた。明治三十四年、時の村長、坂本元明から、西郷神社建設用地として最適地であるので譲ってほしいとの要請があり村へ譲渡した。自らは後原の砂地へ転居した。屋敷内には明治三十五年に南洲神社が、同三十八年には招魂社が同四十三年に南洲文庫が建設された。以降昭和四十三年には手々知名字公民館が、平成四年には沖元綱翁顕彰胸像が建設され、日曜学校の場として、地域住民の学び、ふれあいの場等として広く活用されている。

平成十九年十二月 手々知名字」

【参考図書、参考サイト】

- (1) 西郷隆盛 ― ウィキペディア
- (2) 沖永良部の西郷さん／敬天愛人フォーラム21

(3) 立元幸治・著『器量と人望 西郷隆盛と
いう磁力』(PHP新書)

(4) 土持政照(奄美の人物)『奄美回想録

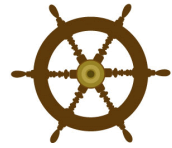
(5) 川口雪篷 ― ウィキペディア

その他、和泊町歴史民俗資料館に展示してあったパネル「島の西郷さん物語(その3)」
「西郷隆盛上陸の地」沖永良部島の西郷さん
その2」などを参考にしました。

(元九州職業能力開発大学校教授)



この頃思ふ事



十五代 沈 壽官

古代ギリシヤにプラトンという哲学者がいる。プラトンはソクラテスの弟子であり、アリストテレスの師である。彼は言う。

『国は船であり、国民とは、強大な腕力を持った怪力の船主である。ただ、目がとても悪く耳が極端に遠い。政治家とは、その船の舵に取り付いている水夫である。水夫は盛んに船主を気持ち良くさせて、寝かしつけようとする。何故なら、船主が眠ってしまえば、船を何処に向けようと、積み荷をどうしようと彼らの思うままだからだ。』

この話、とても古代の言葉とは思えない。自分なりにこの話しの続きを作ってみた。

『何度も騙された船主は、荷物と船を管理するための管理人を置くことにした。(いわゆる役人である。)しかし、水夫はこの管理人をも操作し始めた。管理人の出世、序列を握る事で、水夫に擦り寄る管理人が次々現れ始めたのだ。困った船主は彼らを見張るための新たな仕組みを作った。自分に足りない視力と聴力を期待したのだ。ところが、水夫達は見張りに秘密を適時漏らす事で、この見張りすらも取りこもうとしている。いや、既に取り込まれつつある』

水夫の振る舞いは古代から現在にいたるまで変わらない。この厄介な一群を一体ど

うしたら良いのか。

例えば、現代に目を向けると北の王子様の暴走が止まらない。この水夫達も困ったものだ。

日本の水夫達はアメリカを通じて、国際社会、とりわけ中国がプレッシャーをかけるべきと繰り返し、ついには全面的禁油にまで期待している。随分、威勢が良いが、自分は決して一対一で立ち向かおうとはしない卑怯者だ。

考えてみると、今から約80年前、国際世論の反対を押し切り、隣国への武力支配を貫き、それを非難する国連をも脱退。飽くなき軍拡の末に、やがて国際的な包囲網による禁油の制裁を受け、ついに二進も三進も行かなくなり、斯くなる上はと開戦したのは一体誰だったのか？

身勝手に無謀な判断は、結果として無数の

未来ある無辜^{むし}の船主を死に至らしめた。水夫も管理人も見張りも何の役にも立たないどころか、彼らの無責任さ故に凄惨な結果をもたらしたのだ。

しかし、水夫も管理人も見張りも未だに誰も責任を取らないまま、現在に至っている。彼等のいうところの国家という船は何なのか。それは恐らく船主（国民）不在の船を指している。従って彼等の言う『国の為に命を捧げた英霊』を翻訳すると『我々の為に命を棄てた従順な船主』となる。

こうした過去の経験から我々船主は何を学ぶのだろう。我々には我々の独自の道筋があるはずだ。過ちを糧としなければならぬ。殴り合いの経験も無い小狡い三世水夫達の男節など真つ平だ。そろそろ、我々船主はその怪力を発揮する時では無いだろうか。

師父 聖哲 巨匠 達人 泰斗

澁谷 繁樹



今年の前半はすっ飛んで過ぎた。薩摩川内市は東郷町に住む知り合いの猟師さんが本を出したいというので、出版社との下準備、原稿の下見、出版したらしたで、祝賀会の用意から進行まで、切れ目無く追いまくられて、気づいたら七夕も過去だった。

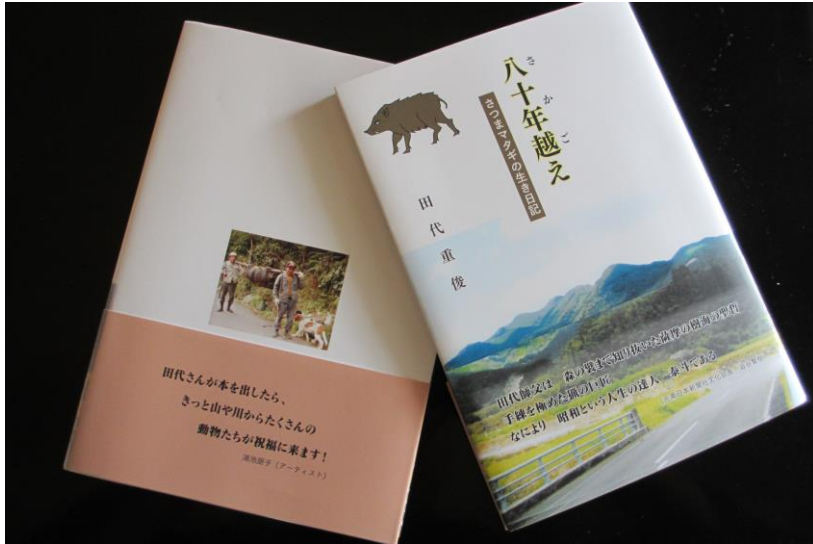
猟師さんは、藤川天神からもうチョイ山に分け入った本俣の田代重俊氏。八十三歳と聞かされてもウソデショと言いたくなるくらい壮健、お酒もビールで勝負となると歯が立たず連戦連敗が続いている。

猟銃は持っていくけれども、とどめを刺す

だけにしか使わない。細い針金でこしらえた小さな小さな罾で、イノシシ、シカを捕まえる。おそらく鹿兒島では比類のない知恵と経験と実績を積んだ罾猟師と機会ある度につぶやいていたら、聞きつけた出版社数社からぜひ本にしましょうやともちかけられ、そのうちにねと長く寝かせているうち、ご本人が八十歳も越えたしなあと書く気に傾き、それはなによりと背中を一押ししたら、短歌をたしなんだりの素養があるせいだろう、読みやすくしておもしろい一代記が出来上がり、祝賀会も弾みに弾んだ。

頼まれて本の帯を書いた。「田代師父は森の襷まで知り抜いた薩摩の樹海の聖哲 手練を極めた猟の巨匠 なにより昭和という人生の達人 泰斗である」。師父は師匠でもあり父でもあり、聖哲は聖人、哲人の総称になる。

泰斗は、大きく高く聳える山。聖哲、巨匠、



田代重俊巨匠の一代記「八十一年越（さかご）え さつまマタギの生き日記」



ヤマタロウは別名モクズの謂われとなったハサミの毛もしゃぶり尽くす



罾にかかったシカはとどめを刺されるまで猟銃の銃口を見つめて目を閉じない

達人、泰斗、字面はオオギョウだけれども大げさな褒め言葉ではない。

巨匠は言う、樹海には銀座通りも裏道も脇道も国道も小路もある。道を見極めて罾を仕掛ける。後は山の神の裁量に任せる。とれてもとれなくても山の神の意志になる。山や川での小用の際は必ず合掌と感謝の言葉を欠かさない巨匠は、神様もお気に入り、罾は百発百中に近く、二百キ近い猪を四人がかりで山から運び出した冬もある。猟に同行したら、見回った十カ所の罾にはすべて獲物がいて、もう解体も面倒くさくなつたな、逃がしましようか、と何匹もお山に帰ってもらつたりもしている。

本の帯は現代美術の鴻池朋子さんも書いている。「田代さんが本を出したら、きっと山や川からたくさん動物たちが祝福に来ます！」。毎年、かなりの数の身内が巨匠に捕まっ

ている連中だから果たして祝福か、恨み節じやないか、と言いたくなるくらい山の巨匠は川の達人でも鳴らす。ウナギ然りヤマタロウ然り。アユも逃さない。

ヤマタロウは別名モクズの謂われとなつたハサミの毛をしゃぶるとうまいんですよ、イノシシは鞆丸が最高で食べた後となるとそりやもうアナタ、イノシシは胆嚢を干すところがまた効能抜群の精力剤で、シカは刺身が一番です、食べ過ぎたらセンブリを煎じて飲めば、一発でなおります。

コンビニがやたら目立つ鹿児島でも、まだ野生に富んだ知識を教える巨匠や名人がいてくれる。田代聖哲に後継者はいない。折角の名人芸が途絶えてしまうのは惜しい気がするけれども、消えて行く背中に嘆きの言葉ばかりをかけてもいられない。

海、空、陸の行き来に支障が出れば、電気

が停まってしまえば、水が出なくなってしまう、例えば、美食もヘッタクレもない、たちまち食べられなくなってしまう食糧自給率四割もない島国の生活を建て直す方が、先の話だろう。テレビでどここの寿司がなんてやってる場合じやないんじゃないですか。

(元新聞記者)



古代ハヤトとは何者か

— 神武皇后選定の段を

手がかりとして —



中山とし子

プロローグ

奈良県橿原市久米町に所在する橿原神宮は、主祭神を神武天皇とする。記紀によると、神武天皇は紀元前七一一年に誕生し、前六六〇年に即位、前五八五年に一二七歳で崩御したことになる。昨年、二〇一六年は、崩御から二六〇〇年目に当たる。記紀の記述があまりに人間離れしているところから、神武天皇は実在の人物ではないとする見解が現在では主流である。しかし、史実であるとす

る意見も根強い。神武東征の年代が正確に定まらないため諸説が展開されているが、近年、古事記の記述に沿う遺物が発掘され始めている。昭和十三年に始まる神武即位二六〇〇年祭の記念事業で、橿原考古学研究所の末永雅雄所長の指揮による神宮外苑の発掘調査が、関西大学と龍谷大学のチームによって行われ、その地下から縄文時代後期〜晩期の大集落跡と檀の巨木が立ち木のまま、一六平方メートルにも根を広げて埋まっていたのが発見された。この根を全部アメリカのミシガン大学に持ち込み、炭素14による年代測定(註)をしたところ、当時から遡ること二六〇〇年前のものであり、誤差は±200年と判明。この事実から、記紀の神武伝承には史実の反映がある、とする説に現実味が出て来た。明治時代になってから、記紀に記されている【畝火(うねび)の白橿原宮(かしはらのみや)



橿原神宮外拝殿（奈良県橿原市）

にましまして、天（あめ）の下治（し）らしめしき】を基に、民間有志の請願に感銘を受けた明治天皇が、一八九〇年（明治二十三年）四月二日に官幣大社として創建されたのが、現在の橿原神宮である。

私は、古事記を偽書であるとする考え方はあまりにも無謀であると考ええる。プロ、アマを問わず数多の論が入り乱れている中、この拙文では、「中つ巻、皇后選定の条」を手掛かりとして、日本語の音韻の変化を考慮しつつ、「隼人」とは何者かを検討し古事記の真意に近づきたい。

一、久米氏と隼人族の位置

『古事記（中つ巻）』の冒頭の神武天皇の条は、神武天皇（註…カムヤマトイハレビコノミコト。正確にはこの時期に「天皇」の呼び名はなく、大王と呼ぶが、ややこしいので、「天皇」と書いておく）の東征物語に続いて、後の選定の物語

となる。霧島の高千穂の宮を出て日向（ヒムカ）を出発した神武天皇の東征に付き従ってきた大久米命（オオクメノミコト）が、天皇に、大后（皇后）とするべき女性を推薦する場面が描かれている。その大久米の命は「鯨ける利目（サケルトメ）」（鯨面文身。刺青の一種）をもっていることから、隼人系と言われている。私は、神武天皇が、大和の橿原の地に落ち着いて後、隼人系である大久米命によって皇后にふさわしい女性のアドバイスを受けることに対して、いくつか疑問を持った。

一つは、時代が下るにつれ記録書に卑しい書き方をされる隼人国人が、古事記の中では、東征する神武天皇の身近にあつて大きな影響力を持つていたことを彷彿とさせること。後の記録書に書かれるように、隼人族は単なる野蛮な未開民族であつたという位置づけで良いのかどうか。古代の隼人とは何者かという

こと。

二つには、大久米命の薦める三島のミヅクヒ（溝咋。人物名）の孫であるホトタタライイスキヒメとその母であるセヤダタラヒメ（註：この人は三輪の大物主命の妻である）の名に「タタラ」が共通してあることの意味。この二つの疑問を検討することで、古事記は単なるおとぎ話ではなく、何らかの史実を反映しているとする立場から疑問を紐解いてみたいと考える。

二、「隼人」を二つに異議分類する

ア、狭義の隼人と広義のハヤト

いわゆる「ハヤト」と呼ばれるものに、九州西南地方に拠点を持っていた特定された海人の部族の呼称と、海を渡ってきて神武東征より以前に日本列島のあちこちにすでに定住していた海人グループの総称、二つの見方で捉えたい。前者を狭義の隼人として、「隼人」、

後者を広義のハヤトとして「古代ハヤト」と書くことにする。

大久米命は、神武東征に日向から日臣命(ヒノオミノミコト。後の大伴氏)と共に付き従って来た者であるから、律令制以後に隼人国人と呼ばれるようになる海人の部族である。従って神武天皇も隼人の地を出自とした海人でないければならない。神武の母は、タマヨリヒメ(玉依姫)であり、タマヨリヒメは、書記巻の第三に【海童ノ小女(ワタツミノオトムスメ) Ⅱ海神の二女】と書かれているところからも海人の家系である。久米氏は宮廷の軍事を司り、神武東征チームにあつては、天皇に対して大きな影響力を持っていたと理解できる。

ひるがえって、時代が下る律令時代(八世紀以降)の記録に、「隼人」は、次のように侮辱的な記述をされるようになる。【薩摩、大隅らの国人、初め背き、後に服するや、諾講して云

はく。己れ犬となりて、人君に仕へ奉るてへりと。此れ則ち隼人と名付くるのみ】『職員令集解』隼人司条。

記紀編纂の時期(八世紀初)、隼人族は盛んに政権に抵抗し、七百年頃より大隅国を主体にする「ハヤトの反乱」と呼ばれる抗戦が頻発した。歴史は、権力闘争の勝者によって書かれるものであるから、隼人族が古事記の編纂された八世紀には、政権から遠い立場だったことがわかる。朝廷に反抗するものは悪であり、当の政権に蛮族と表記されるのは当然である。それにしても、この表現の仕様は、記紀において天皇家の起源を隼人の地である九州西南部に起こしておくしながら、あまりにも侮蔑的ではないだろうか。私はここに政治権力の恣意的な意図を読まないわけにいかない。当代政権にとってその存在が脅威であったし、当時の政権の優位性を示す為の作業が

必要だったのでないかと推察される。隼人族は大和朝廷に服属以後、強制的に大和の地に移住させられたことが、『続日本紀』の靈鬼二年（七一六）、養老元年（七一七）、養老七年（七二三）等の朝貢の記事（資料③その他）等にかかれていいる。

又、『延喜式』卷二八、「隼人の司」の条には、【番上隼人二十人、今木隼人二十人、白丁隼人百三十二人】が、元日の即位や客が入朝した時などの儀式に駆りだされたことを示しており、今来隼人が【吠声三節発す】とあるのは、いかにもこの当時の隼人族の日常における異人ぶりを伝えているように思われる。

イ、広義のハヤト

しかし「ハヤト」には、もう一つ概念があったと私は考えている。これを広義のハヤトと位置づけ、以後「古代ハヤト」と書く。

私は、ハヤトは渡来系全般と捉えている。

これは南洋系（資料③大林太良「民族学から見た隼人」）と大陸系に大きく分けられるだろうが、いまは紀元前五、六世紀、あるいはそれ以前から紀元後二、三世紀の話で、海を渡ってきた人々が日本列島に住み着いていたと思われ、それらの人々のことを「古代ハヤト」とひとくくりに考えることにする。もつとも、当時は現代人が発する「ハヤト」という発音ではなく、「海人」を表す概念としての位置づけであったことが考えられる。

古代ハヤトは、神武東征以前から近畿一円と言わず北九州や日本海側等、日本列島のあちこちに住み着いてそれぞれ自治を行っていたと考えられる（資料⑦）ハヤトは海人であり、海人は海を自由に渡るのだから、潮に乗って日本列島と周囲の大陸や島々を往来し、土地々の物品や技術を持ち帰っていたと考えられる。当時としては、大変進んだ人々であっ

たはずだ。このような状況では、神武以前にも列島の西方九州地方から東進したグループがあつても不思議ではない。神武天皇の皇后選定のいきさつを述べるくだりから、「隼人族」が、一豪族として九州だけに存在していたと考えては納得のいきかねる部分が生じる。一、二世紀のころまでは「肥人ニクマヒト」と呼ばれていた狭義の隼人族とも類似点を持ちながら、もつと古い時代から日本のあちこちに存在した大きな「古代ハヤト」が浮かび上がってくる。こう考える理由を、先にも上げた二つの疑問点を具体的に検討することで明らかにする。

三、疑問点の検討

①…大和(奈良盆地)に神武が初めて足を踏み入れたとするなら、その随臣である大久米命が、三島のミヅクヒやその女のことなどをよく知っているような書きぶりはなぜか。

なぜ三島のミヅクヒの孫を后とするよう薦めるのか。

ミヅクヒは摂津に住んでいる。摂津は、畿内における山城、大和、河内、和泉、近江、丹波、紀伊等と同じような、主に阿陀隼人の移住地と云われる。又、京都府京田辺市は、大住隼人の移住地である。これらの土地に、律令制以後、隼人国人が初めて強制移住させられたのかというと、これは考えにくい。元々の隼人族の移住地であつたから、そこに更に強制的に移住させたのだらうと思われる。つまり、摂津は早くから隼人族が自然に移住した地であつたと考える。ここに住んでいるミヅクヒは、遠くは隼人一族で、古代ハヤトと位置付けられる。ミヅクヒの拠点三島は、大阪府三島郡に比定され、今も茨木市安威川沿いに溝咋神社が鎮座。又、厠の造りからも海人であると思われ、神武東征以前からそこに

定住していた「古代ハヤト」であると考えられる。

資料⑦『古代日本と海人』は、ミヅクヒが東征チームより早くそこに移住していたと主張する。又、神武東征が隼人族と吉備の連合チームによって行われたとする。(註：吉備系の祭祀遺物である弧文円板(こもんえんばん)が出土しているため) 人と文化の流れが、舟山列島から九州、さらに黒潮に乗って国東半島から瀬戸内海を、あるいは四国沖を廻って紀伊半島に至るとする。彼らは陸地と近い海岸線になぞりながら、時には陸地上がり、そこに滞在してその一族を伴いながら少しずつ東征した。吉備の一族も、古代ハヤトの民が、神武以前から自然な流れとして移住していたその子孫(註：大伴氏)であるとされる。古代ハヤトが、瀬戸内海や畿内の水辺のあちこちに移住していたことは自然であり、拙文では、

これを「古代ハヤト」と仮に名付けているわけである。これに従うと、大久米はハヤトつながりであり、三島のミヅクヒについて情報を得られる立場にあつたし、いわば同族であつた。故に、神武にミヅクヒの女との婚姻を薦めるのは自然である。

②…セヤダタラヒメとホトタタライスケヨリヒメに共通する音「タタラ」とは何か。

ミヅクヒが久米と同族の古代ハヤトであることはもちろん、同族だからという以外に、ミヅクヒは何らかの他の古代ハヤトにはない大きな力を持っていたと考えられる。ミヅクヒの娘、勢夜陀多良比売(セヤダタラヒメ)と孫の、富登多多良伊須須岐比売(ホトタタライススキヒメ、または、ヒメタタライススキヨリヒメ)の名に共通の音「タタラ」があることに注目しないわけにいかない。テキストにより「タタラ」の解釈が異なるが、講談社学術文庫の

『古事記』と新潮社『古事記』は、いずれも「タタラ」は【鍛冶に用いる大形ふいこの踏鞴による名】、【ふいこの踏鞴との関連が疑われる】とする。私もこれに賛成である。しかしこれとは別に注目すべきは、古事記では、後に神武の后になるミヅクイの孫、ホトタタライススギヒメ、または、ヒメタタライスギヨリヒメが、日本書紀では、ヒメタタライスズヒメ(媛踏鞴五十鈴媛命) 又はイスズヒメノミコトに名を変えられていることである。このことはとりもなおさず「イスズヒメ」の名が意図的に造られたものという懸念を抱かせ、資料⑤は、天皇家の祖アマテラスを祭る伊勢神宮との深い結びつきを示唆する意図が感じられる、とする。従って書紀の書きぶりはことさらに伊勢神宮を天皇家の系譜に組み入れようとする意識するものとなっており、古事記の立場は、天皇家の祖を渡来系(百済系か新羅系か大陸

系かの見極めは年代が定まらないので不可能)と結びつけることにあまりこだわりをみせていないように思われる。しかし、記紀のどちらも「姫踏鞴」の部分は一致していることから、「タタラ」は金属の鑄造に使うふいこの「踏鞴」であり、ミヅクイが鑄造技術に関係していたことを示す名のりであると考えられる。

以上のことから考察されるのは、三島のミヅクヒは元々は渡来系であり、鉾山と関係するか鉄の鑄造技術までもっていた可能性があるとということ。もともと、その当時、自分たちを「外来」と考えていたかどうかは疑問である。隼人一族は、下つてからは呪術や儀式における舞事を司っていたことが記録されているが、それ以上に、隼人族(二世紀までは肥人(クマヒト=句麗人か?)は、軍事担当が主な仕事である。隼人一族は同じ渡来系の兵器を

作る技術集団と近い関係であつてもおかしくない。当時は鑄造技術はハイテクであつて、これを手に入れることが、すなわち権力を手に入れることであつたわけだから、神武が三島のミヅクヒと結ぶことは、権力を強めるためには必要なことであつた。ミヅクヒが金属の鑄造技術を持つていたことが、娘、孫の名前からわかるわけである。

それに加えて「ホ」は「火」に通じるのであり、やはり踏鞴を使う技術者集団が神武の背後にあり、古事記は素直にそれとの関連を述べたにすぎないのではないか。その集団との提携を意図して、隼人族である大久米が神武にミヅクヒとの婚姻を薦めたという結論に行き着く。

仮説であるが、古事記が述べるところの神武東征とは、大和政権以前に九州で一大勢力を持つていた豪族の東征を象徴する記述なの

ではないか。彼らは、初め、一人の優れたリーダーを中心として東征して来、海岸線のあちこちにバラバラに定住していた大伴氏のよいうな先住古代ハヤトをも加えながら、百年以上かかって紀伊半島に至つた集団と推定される(註:神武天皇は、二七歳まで生きたとされる)。

ミヅクヒも久米も渡来系であり、古代ハヤトそのものが、祖は海を渡つてきた渡来系の海人であることになり、古代の大王(註:天皇の命名は、奈良時代後期、四十代天武天皇から)も同じであろう。大久米がミヅクヒの孫にあたるホトタタライスケヨリヒメ(註:日本書紀では、ヒメタタライスケヒメノミコト)媛踏鞴五十鈴媛命と変えられる)を神武に薦めるのは、自分と同系統の部族であり神武とも近い技術集団と手を結ぶことを意味している。

また外来の権力者は土着の実力者の女を娶るとするルールがある。ホトタタライスケ

ヨリヒメは、三島の孫であると同時に、朝鮮半島から渡来してきた陶器生産者の流れをくむ三輪の大物主の娘にあたる。神武の婚姻譚は、三島の金属鑄造技術集団と三輪の百済系陶器文化を持つ部族、そして西からあちこちの土地の氏族をも加えながら上がってきた新興集団が、互いに手を結んで政権を作り上げたことを表している。いわば、大和政権とはオールジャパンである、ということを書き記した編纂者は意図したのではないだろうか。神武のもとでの居住地とされる日向は、大和地方よりも早くから鉄の文化を持っていたとされ、三島は、いわば親戚のようなものだったと推定される。

四、結語

以上の疑問点を考察する過程で「隼人」と「古代ハヤト」の関連性やその様相を検討してきたが、いわゆる律令制の始まる前と後と

で包括する意味は異なるのではないかとこの結論に達した。「隼人」と漢字を持つて侮蔑的に呼ばれ出したのが、七世紀の後半天武朝からである。この場合の「隼人」とは、南九州の特定の氏族を指す。神武東征のころより存在はしていたが、そのころは「ハヤト」とは呼ばず肥人（クマヒト）とある。同時に渡来系の「海人」の一団が列島のあちこちに定住していて、次第に地歩を固めていった。この人々のことを早い時期には、海の民を表す言い方で呼んでいたのだろうが、定住すればそうは呼ばれなくなり、反対に、大和政権が成立した後も政権に随うことをしなかった「クマヒト」は、「隼人国人」として特に天武朝以後、征伐を受ける。天武朝と隼人族の祖とは出祖が違うか、あるいは、政権が隼人に繋がることを消す必要が生まれたことが考えられる。日本国として系譜を整え、対外的に（主に中

国に) オールジャパンとして一つにまとまっている形を示さねばならないのに、東北の蝦夷と隼人族だけが従わないことは国益を損ずる。外国に付け入る隙を与える。そこで八世紀初頭、隼人司が設けられ、政権の締め付けが厳しくなっていく。今で言うグロバリズムの波が、政権から地理的に遠い地域にも攻め寄せたという構図だろうか。その頃の記述には隼人が朝貢に苦慮する姿や、野蛮人であるかのような姿、天皇の従順な下僕といった記述が見られる。あえてこのように書かずにはおられなかった政権側の事情が垣間見える。隼人の朝貢は大化前から始められ平安朝まで続く。これほど長い期間は、隼人国だけである。天皇家と隼人族との密接な関係を示しているように思われるのだが。

古事記と日本書紀は編纂の立場が異なるようで、特に神武天皇の条に限ると、古事記

では渡来系を排除するかのような記述は見られないのに対して、日本書紀においては、古事記の記述の仕方とは変えられている。詳細はこれからの研究に待たねばならないが、海を渡ってきて海上事情に詳しい人々のことを早くから海人と呼び、「ハヤト」に近い音で呼んでいたのではないか。その海人にも、朝鮮經由の中国系あり、新羅系あり、百濟系あり、南洋系あり、台湾、中華系ありと、様々であつたろう。が、その人々が長く日本列島に住んでおれば、次第に祖を同じとする者同士が固まり異部族とも婚姻関係を結び、土地の部族としての地歩を固める。七世紀末から八世紀には、九州西南部の端にいて政権に服属を拒んだ人々が一族として、「隼人」の字を当て「隼人族」という単位で呼ばれたが、これ以前には、広い意味の古い渡来系を概念としてハヤトと認識していたのではなかった

か。

次に、日本語史の立場から「ハヤト」は、「海人」(ワタヒト)ではないかと仮定し、「ハヤト」の語義語音を遡って検討する。

五、日本語史から推理する「ハヤト」の起源 — 仮説

秦氏は大陸の様々な技術や文化を日本にもたらした中国系の氏族で、百済経由で日本に帰化移住したと言われているが、いまだに正確な事はわかっていない。秦氏とゆかりのある地には海人がいて古代ハヤトのゆかりの地ともなっている。

ハヤヒトのハヤ【HAYA】とハタ【HATA】のH音は、古代からP→PH (f)→H (h)と変化しているから(註:P音考。上田万年)、古代の「ハヤ」は【PAYA】又は【PHAYA】、「ハタ」は【PATA】又は【PHATA】であった可能性が高い。「秦」を古代朝鮮でどの

ように発音したか考慮する必要があるが、ハヤトは【PHAYAPHITO】の【PHI】が脱落して無声化し、【PHAYATO⇨フアヤト】になったときには、ハは半母音だから次の音素に組み込まれる。するとPHAYATO→PHATOとなり、PHATAとは最後の母音OとAの違いだけとなる。現在の分析方法に従えば、二つの母音は調音点は後舌でほぼ同じであり、普段の会話ではOは唇の開きが半狭音であるが、大きく延ばす音になると半広音となってAの延ばす音と違いが聞き分けにくいところから、【PHATO (ナト)】と【PHATA (フアタ)】は音声的には大変近い音になる。日本語史の立場からは、意味的にも類似のものを表す言葉だった可能性が高い。ハタ(パタ)が古代朝鮮語で海を意味するという説があるが(資料⑨その他)、ハヤトも海の民という意味ではなかったのだろうか。万葉時代は「海」

のことを「わた」と発音したらしいことが万葉集にあり、「ハヤト」は「ワタの人」＝「海の人」と言う意味に解される。「ハヤト」はすなわち「海人^{わたひと}」と考えても良いのではないかと思われるからである。更に詳細な調査検討が必要ではあるが、一つの仮説として考える。

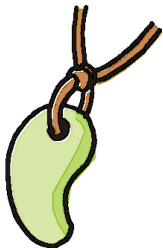
(エッセイスト)

【文献・資料】

- ① 『古事記(中) 全訳注』次田真幸 講談社学術文庫 一九八〇
- ② 『古事記』日本古典文学全集1 山口佳紀・神野志隆光校注 小学館 一九九七
- ③ 大林太良編『日本古代文化の探求 隼人』社会思想社 一九七五
- ④ 中村明蔵『南九州古代ロマン ハヤトの原像』丸山学芸図書 一九九一

- ⑤ 千田稔「伊勢のアマテラス」『環シナ海文化と古代日本』人文書院 一九九〇
- ⑥ 菅野雅雄「神武皇后説話の形成」『古事記説話の研究』桜風社 一九七三
- ⑦ 黒住秀雄・薬師寺慎一・藤岡 章『古代日本と海人』大和書房 一九八九
- ⑧ 中村明蔵『クマソの虚像と実像』丸山学芸図書 一九九五

註・「炭素14年代測定方」とは、動植物の内部における炭素14の存在比率が死ぬまで変わらず、死後は新しい炭素が補給されなくなるため存在比率が下がり始める。この性質と炭素14の半減期が5730年であることを利用し、有機物の年代測定を可能にする方法。



朝河貫一と

『入来文書』と入来院貞子



梶原 宣俊

はじめに

二〇一七年（平成二十九）二月、四年間続けてきた「着物で出水武家屋敷を歩こう会」が「第七回地域再生大賞優秀賞」（共同通信社主催）を受賞し、その報告に渋谷俊彦市長を訪ねたときであった。

渋谷市長が、一冊の分厚い本を持ってこられた。それが、朝河貫一著、矢吹晋訳『入来文書』（二〇〇五、柏書房、七二〇ページ）であった。私は、その名前くらいは知っていたが、初めて目にするこの大著に驚いた。渋谷

市長は、渋谷一族の歴史と入来院について熱く語られた。私が強い関心を示すと、どうぞお貸ししますから読んでみてくださいと言われた。私は、遠慮なく借用することにした。しかし、この大著は、私にとって難しく苦勞していた。そんなとき、私は入来院貞子さんという名前を思い出した。

私は、十年前に、妻の故郷である出水に住み、喜多流の謡曲をやっていたので、鹿児島謡曲連合会に入会し、中西喜彦会長にお会いした。その中西さんから『炉ばたセイ談』という個性的な雑誌をいただき、読んでいた。そこで、入来院重朝、貞子夫妻のことを知っていた。この雑誌は、小冊子ながら大変な中身の濃いものであった。入来院貞子さんは、一九九四年に東京から夫の故郷入来町に住み、地域おこしグループ「入来花木水会」の代表として七年間、入来薪能を主催してこられた

方である。私は一度お目にかかりたいと思いつながら、ついにそのチャンスがなかった。二〇一一年(平成二十二年)に永眠されたと聴き、慙愧に堪えなかった。

今年の二月下旬、私はようやく入来麓に行き、入来院重朝氏にお会いした。貞子さんの位牌に手を合わせさせていただき、少し話をさせていただいた。『炬ばたセイ談』の話も出て、帰りに『貞子の語る入来文書』をいただいた。この本は、私にも読みやすく、『入来文書』の入門書として出色のものだと思われた。そこで、この本を中心に、朝河貫一と『入来文書』と入来院貞子について私の思いを書いてみたい。

一、朝河貫一の生涯

朝河貫一は、偉大な人物であるが、その地味な中世封建史の専門家ゆえに日本では必ずしも有名ではない。私も全く知らなかった。

朝河は、一八七三年(明治六)、福島県二本松市で二本松藩士の子どもとして出生、小中高と秀才の誉れ高く、一八八八年(明治二十一年)、福島県尋常中学校(現福島県立安積高校)に入学し、英国人教師トーマス・エドワード・ハリファックスに英語を学び得意科目であった。一八九二年(明治二十五年)東京専門学校(現早稲田大学)に入学し、首席で卒業。在学中に、大西 祝、坪内逍遙、夏目漱石等の教えを受けている。この時、横井時雄により洗礼を受けている。一八九五年(明治二十八年)大隈重信、徳富蘇峰、勝海舟らの援助を受けて、米国ダートマス大学に留学、一九〇二年(明治三十五年)イエール大学大学院を卒業、博士号取得、ダートマス大学の講師となる。一九〇六年(明治三十九)米国議会図書館、イエール大学図書館から依頼され、日本関係図書収集のため一時帰国(第一回)。一九一七



朝河貫一（1940年撮影）

年（大正六）東京大学史料編纂所に調査研究のため二回目の帰国、このとき、入来文書との運命的な出会いを果たすことになる。一九一八年（大正八）朝河は入来村を訪れ、八日間滞在した。旅館から役場に連日通いつめ、「入来院家文書」や「清色亀鑑」など十数巻の古文書や系図類を調査し、次々と筆写していった。一九二九年（昭和四）、その成果が、イエール大学とオックスフォード大学から英

文版「THE DOCUMENTS OF IRIKI」として刊行された。朝河は、一九三七年（昭和十二）日本人初のイエール大学教授となり、一九四八年（昭和二十三）バーモント州ウエストワーズボロで永眠した。七五歳であった。

私が驚いたのは、日欧の中世封建制の比較研究への情熱と功績はもちろんのことだが、それ以外に、明治大正昭和の激動の時代を見据え、平和の提唱者として積極的に行動していた事実である。一九〇九年（明治四十二）『日本の禍機』を著わし、日露戦争後の国民の興奮に警鐘を鳴らし、このままいけばやがて日米開戦になることを予測し、敗北すると警告している。そして、一九四一年（昭和十六）には、日米開戦の回避のために、ラングドン・ウオーナーの協力を得て、ルーズベルト大統領から昭和天皇宛ての親書を送るよう

に働きかけを行っている。さらに、敗戦後は、天皇と共存した民主主義国家の構想を描いていた。

朝河は、優れた歴史学者であるとともに、当時の世界情勢を的確に分析、洞察していた国際政治学者でもあり、平和の提唱者でもあったのだ。(この件に関しては、BS朝日テレビが、二〇一〇年四月四日「歴史ドキュメンタリー」で「海を渡ったサムライ―朝河貫一、日本に警鐘を鳴らした真の国際人」として一時間五五分の番組を放映している。また二〇一六年には、金高健二監督によるドキュメンタリー映画「ウオーナーの謎のリスト」が京都国際映画祭で上映されている。ウオーナーは、朝河と戦争回避の行動を行うとともに日本の文化財一五一か所の保護リストを作成し守った恩人である)

私は、昭和二十一年の生まれで、学生時代

から、生まれる一年前まであったあの悲惨な戦争の歴史が気になり、戦争の歴史と体験について考え学んできたから、朝河の論文と行動が大変気になったが、これについては、また別の機会に書いてみたい。

二、朝河貫一著 矢吹 晋訳『入来文書』

さて、朝河貫一の『入来文書』(二〇〇五、柏書房)は七二〇ページに及ぶ大著であり、緻密で極めて専門的な本である。私にはとても手の負えない内容である。そこで、入来院貞子の『貞子の語る入来文書』(二〇一二高城書房)を参考にしながら書いてみたい

『入来文書』は、日英文の序文に続き、序説で南九州、嶋津家、渋谷家、入来院の地名と固有名詞について述べている。次に文書の解題・注釈が一五五項目にわたって書かれている。そして、論点の要約が、起源・発展・諸関係・体制としてまとめられている。最後

に、ヨーロッパの学者3人の書評と訳者矢吹晋の詳しい解説が書かれている。矢吹は、最後に五〇頁にわたる訳者解説を書いている。

朝河は「序説」で、南九州が南の海とアジア大陸に近く、つねに外国の影響を感じながら、地方独立の雰囲気を育ててきた重要な地域であることを強調している。大陸文化と仏教の導入、仏教と神道の混交、朝鮮・中国との政治通商関係、私的な武士の象徴、自律的な封建国家の発展、南ヨーロッパのローマカトリック国家との接触等が、封建制日本を打倒し、新体制を樹立する明治維新を可能にしたと述べている。南九州は、薩摩・大隅・日向の三国からなり、皇室発生の地であり、熊襲という凶暴な種族の居住地であり、封建時代の日本でおそらく最大の領地を最も長期に一つの大名が保有した、全時代を通じて特別に重要な地域であると強調している。そして、

「入来」はこの地域で長く変化に富む経歴のなかで際立った役割を果たしたと強調している。

島津庄は、十一世紀初期に生れ、一一八六年から実質的な封建体制が始まった。鎌倉幕府を創設した源頼朝によって、日向・大隅・薩摩三国の守護となったのが島津家の祖先である島津忠久である。忠久は、ここ出水、木牟礼にも滞在したという。現在、木牟礼城跡はわずかな痕跡を残すだけで、国道三号線の側にひっそりとたたずんでいる。

一二四七年、鎌倉から渋谷兄弟が支配者として赴任し、ここから入来院氏の歴史が始まる。朝河は、渋谷氏のルーツ桓武天皇から渋谷重国までの系図を載せている。渋谷氏は川崎から出て、武蔵の渋谷と相模の渋谷に分かれ、相模の渋谷氏が薩摩に下向することになる。一二二一年の承久の変で源氏が三代で断

絶し、北条氏は鎌倉幕府成立に功績のあつた豪族（梶原・比企・畠山・和田・三浦）を滅ぼし、独占的支配を確立していた。渋谷光重は北条方として功績をあげ、甕島を除く薩摩の川内・東郷・祁答院・鶴田・入来院・高城の地頭職となる。一二四八年、光重は、長男のみを関東に残し、次男以下五人の兄弟を薩摩に送り出した。五兄弟は、渋谷党と呼ばれ、次男実重が東郷、三男重保が祁答院、四男重諸が鶴田、五男定心が入来院、六男重貞が高城を支配した。

こうして、各自は地域の名前を姓として名乗り、先住の豪族（大前・大蔵・宮里等）を傘下に治めていく。この「渋谷五族の消長」については、入来院貞子が、『千台』（薩摩川内市郷土研究会誌三十六号）で詳しく書いている。

しかし、この渋谷五族も、やがて島津氏と

の抗争の過程で統合されていく。

その過程で、もつとも強力で最後まで抵抗したのが入来院であった。朝河によれば、入来院が島津の真の家臣となったのは一五七四年であると書いている。

かくして『入來文書』は、六百年に及ぶ日本中世封建時代の貴重な資料として、朝河によつて世界へ発信され、私たちも読むことができるが、私の能力ではここまですが限界である。

私は、鹿児島に来てから、各地の古風な難しい地名や氏名に驚いていたが、その理由をかい間見ることができ、鹿児島島の歴史を明治維新だけではなく、中世まで遡ることによつて、多少理解することができた。

さらに私が驚いたのは、朝河貫一が明治以後の日本の近代化のなかで、米国に在住し、日本とヨーロッパの中世封建制度の比較研究

に没頭し、欧米で高く評価されていることである。日本では評価されずに、欧米で評価されて初めて日本で有名になったという例は多いが、朝河はなぜ日本で有名にならなかったのだろうか。

「入来文書」が英文の大著で、高度な専門性を有していたからだろうか。

矢吹は、最後の訳者解説で、この大著・朝河史学が学界においてなぜ黙殺されてきたかについて、日本中世史学界の視野狭窄を指摘している。私も、多少大学教育に携わり研究者の世界を垣間見た経験があるので、よく理解できる。朝河は、緻密な研究者であると同時に、世界的な視野と行動力を有した稀有な学者であったことは、前述した戦争との関わりを見れば一目瞭然である。いわば、虫瞰図と鳥瞰図をともに有しているのである。

矢吹もまた、中国経済・中国現代論が専門

で多くの著書がありながら、朝河貫一を研究し、さらに、『敗戦・沖繩・天皇』や『尖閣衝突は沖繩返還に始まる―日米中三角関係の頂点としての尖閣』等で、現代的問題にまで切り込んでいる。朝河と同様、虫瞰図と鳥瞰図をともに有している研究者に思える。

ここで、矢吹と朝河との運命的な出会いについて、訳者あとがきから要約しておこう。

矢吹は、一九五四年に福島県立安積高校に入学した七〇期生で、朝河（四期生）の後輩なのである。矢吹は、一九五〇年代に、同じ高校の先輩安部善雄『最後の日本人』著者一九八三の「辞書食い」（英和辞書を、毎日二ページづつ暗記し、食べるか破り捨てていったというエピソード）の話を聴き、朝河伝説の中で育ったと述懐している。一九九〇年、「朝河貫一研究会」が発足し、二〇〇四年には「朝河貫一顕彰協会」が旗あげし、安部急逝に伴

い、中心的存在になつていく。かくして、『入

来文書』の邦訳にたどりつく。その後、矢吹は『朝河貫一とその時代』(二〇〇七)、『日本の発見―朝河貫一と歴史学』(二〇〇八年)ともに「花伝社」を出版している。また、余談ながら、矢吹は二〇一〇年夏に出水の麓武家屋敷を訪問し、ガイドが朝河貫一や「入来文書」、薩摩示現流が入来院一族の東郷家に始まることも知らなかったことに落胆している。さらに、鹿児島市の尚古集成館の島津家系図が、島津忠久が源頼朝の子であるかのように展示されていることに疑問を投げかけている。朝河も矢吹も「島津忠久の生い立ちをめぐる」で疑問を呈しているのである。矢吹は第七四回朝河貫一研究会で、そのことについて詳しく論じている。そこには、入来院貞子も参加していた。かくして、入来院貞子もまた、朝河や矢吹、入来文書との出会いにより、入来

で輝かしい実績を残している。

三、入来院貞子の生涯

入来院貞子は、昭和八年長野県諏訪郡上諏訪町に生れ、昭和三十一年、入来院重朝氏と学生結婚、早稲田大学卒業後、富士電機会社に勤務し、平成六年、夫の故郷入来町に移住し、精力的に様々な活動を継続してこられた。まず、入来町の地域おこしグループ「入来花木会」の代表として七回にわたって「入来薪能」を主催してこられた。その歩みについては、「炉ばたセイ談」平成二十六年秋号にパンフレット表紙とともに演目が記載されている。また、ネットで、第六回、七回の薪能の様子や入来院貞子さんの挨拶を見ることができ

きる。前述したように、私もまた五十代に喜多流能楽師大島政允氏(広島県福山市)に出会い、能謡曲を学んできた。特に薪能が好きで数多



入来院貞子

く鑑賞し、地謡を務めたこともある。出水に住んでからは、麓武家屋敷で、いつか薪能をやりたいと夢見てきた。鹿児島は在住の能楽師が不在で、江戸時代は盛んであったらしいが、現在は能を鑑賞する機会は極めてまれである。そのような中で、入来で薪能が七回も上演されたことは驚きである。薪能の上演は経費も高く、実現には相当の苦労があったと思う。私も一度見に行きたいと思いつつにチャンスがなかったのが残念である。

入来院貞子はさらに、朝河貫一研究会理事として活躍し、夫君や矢吹晋氏とともに米国立イェール大学やダートマス大学を訪問しておられる。矢吹晋の講演会もたびたび企画され、鹿児島市日中友好協会常任理事としても積極的に活動してこられたという。さらに、そのような実践活動だけでなく、文芸誌「火の鳥」「ゆうすげ」歌誌「にしき江」同人として数多くの作品を発表しておられる。「炉ばたセイ談」平成二十三年秋号には、その作品リストが掲載されている。それによれば、現代小説・論評が十作品、歴史小説・歴史論説が七作品、エッセイが一四八編、研究論文が五編、寄稿文が二編、自伝が一編、短歌が一六四首も存在している。そして著作が二冊ある。その類まれなる才能と行動力には驚かされる。まさに「スーパーばあちゃん」である。

「運命の星」（「炉ばたセイ談」平成二十二

年夏号)では、青春時代の社会運動での出会いや別れ、重朝氏との学生結婚、子育ての様子が生き生きと描かれている。そして、最後は次のように締めくくられている。「夫の観る四柱推命によれば、私は自刑という星があつて、自我が強く猪突するが、一方珍しい貴人星が二つもあり、その欠点をカバーし護つてくれていたという。私は素直に信じている。運命に感謝し、夫に感謝し、祖霊に感謝するばかりである。加えて、この過疎の祖霊の地を文化の里として輝かせることが出来たら、もう言うことは何もない」

かくして、入来院貞子は二〇一一年(平成二十三年)五月二日、不慮の事故で永眠された。七十八歳であった。

終わりに

朝河貫一、矢吹晋、入来院文書、入来院貞子という偉大な存在との出会いは私にとつて青

天の霹靂ともいふべきものである。

特に入来院貞子は、身近な地域の存在として大変衝撃を受けた。同時に、その功績には足元にも及ばないが、何かしら共通性を感じ、親近感を覚えた。

私は、貞子さんより十三年遅れて昭和二十一年六月、福岡県で生れ、熊本大学で学び、学生時代は学生運動やセツルメントという地域活動に熱中し、現在の妻と出会い、卒業後に結婚した。また、太宰治や吉本隆明に出会い没頭した。仕事は広島、福山、福岡のYMCAという国際団体で働いてきたが、十年前に定年退職後、妻の故郷である出水に居を定め、様々な地域活動に尽力してきた。

鹿児島・出水の歴史に関心を持ち「いずみ郷土研究会」に入会し、野田にある俊寛の逃亡伝説や、甕島の梶原一族等を調べ投稿してきた。また、鹿児島まちの駅や出水の戦争遺

跡、平和ガイド、着物で武家屋敷を歩こう会等を体験し、出水の活性化のために、自分なりに一生懸命やってきたつもりであった。

しかし、入来院貞子さんに比べれば、まだまだ力不足、努力不足であったと痛感した。これをご縁に、「炬ばたセイ談」の皆さまと交流させていただければと願っている。

(癒しと学びと語らいの里・ハーブガーデン
花びあ(民宿・カフェ)代表、個人と地域のキャリア開発を支援する国際キャリア研究所所長)

参考文献

・『入来文書』朝河貫一(柏書房 二〇〇五)

・『貞子の語る入来文書』入来院貞子(高城書房 二〇一三)

・『正・政・清・聖・性・醒 炬ばたセイ

談』(二〇一〇～二〇一六)



入来の代表的景観である庶流入来院家の茅葺門
(2003年12月撮影)

平均寿命まで生きて思うこと



中西 喜彦

一、はじめに

早いもので、気がつくと八月で八十・六歳となり、平均寿命まで生き延びた。今まで人は何のために生きているのかと考え、次は如何に生きるかと考えながら過ごしてきた。今後は如何に死ぬかの段階になった。

最近、平均余命と言う概念が出てきている。現在八十歳の男性は八十八歳、女性は九十一歳まで生存すると言う統計値である。

さて、この余命八年間をどう過ごせば良いのだろうか。有難いことに本誌にそのヒントが沢山出ていることである。六号の貞子さん

の半生記、桐野前会長の各号で見られるウフの人生論、八号の福元忠一元入来町長の「人生わずか八十年」喜怒哀楽の思い出をそつと、またニンマリと骨壺まで持つて行くという話また、臨終に臨んでは、益壽滋雄医師の「肺がんの記」で自らの「終末期医療・ケアへの意思表示」サンプルが提案されている。全員鬼籍に入られたがどれも人生を掛けたお手本の生き方と思考する。

一方庵主重朝氏は貞子さんが亡くなられた時の歳から平均余命を無事乗り切られ新たに百歳生存へ向けて頑張つて居られる。早朝先祖の墓に参り、大きな家屋敷を一人で管理して居られることは驚嘆に値する。

しかし、それ以上に戦後の東京裁判史観と違つた歴史観をお持ちである。メソポタミア（イラン）に発する日本人の源流が日本国内で織りなす各時代の葛藤を経て、江戸時代で

確立されたサムライ精神を天皇制と共に尊重して居られることである。中学生時代に敗戦による喪失感を「虚無」と言う表現で引きずって来られている。これを本来の日本の姿に戻したいと祈願しておられる。

筆者もこのような考え方に賛同するところが多い。残りの人生を有意義に過ごすためにも今までの人生での所感を再度まとめてみたい。

二、筆者の略歴

支那事変の始まった昭和十二年二月、霊峰英彦山の麓添田で生まれた。小学校五回（当仁、一貴山、柳川、八屋、箱崎）中学校二回（学芸大付属、久留米城南）、高校二回（明善、八幡）、鹿児島大、九州大院と經由して、二十七歳で昭和三十九年五月鹿児島大学に助手（農学部）として就職した。

三十一歳で当時純心女子高校教諭をしてい

た新堂恵子と結婚した。その後、三十二歳で長女、三十三歳で次女、三十四歳で長男を得ている。三十二歳で農学博士を授与された。三十五歳で助教授を拝命した。

三十八歳の時国立がんセンター研究所薬効試験部に一年間内地留学した。また、五十一歳の時半年間米国ウイスコンシン州立大学畜産学科に文部省在外研究員として留学した。五十三歳で教授を拝命した。六十二歳のとき鹿児島大学ラジオアイソトープ総合センター初代センター長を拝命した。六十五歳で定年退官した。その間学部図書委員や学部教務委員を務めた。

助教授と教授の二十九年間に卒業論文・修士論文・博士論文で携わった学生は学部生百八十九名（内女性五十七名）、修士五十九名（内女性十名）。博士二名および研究生十名である。

その後、ジャパンファームクラウン研究所

技術顧問を二年、鹿大生命科学資源開発研究センター異種移植分野特任教授を二年半務めた。

在学中剣道部に所属して二段を取った縁で昭和五十五年から昭和六十三年まで鹿大剣道部部长として剣道に関わった。

現在も続けている能楽については権藤道夫元鹿児島大学教授が学生相手に謡を教えておられることをお聞きして教わることになった。大学院で福岡の実家に戻った時能楽師を紹介して頂き現在まで続けている。しかし、四十歳から六十歳の二十年間は流石に続ける余裕はなかった。六十三歳で能「花月」、六十八歳で能「高砂」披くことが出来た。

七十歳で生まれ故郷添田町にある英彦山に参詣し自分の初心なるものを考察した。また、退職後、欧米、エジプト、中国、台湾の霊廟を周り海外の祀り方を見学した。国内では百

舌鳥古墳、箸墓古墳などを廻った。最近は善光寺、高野山に参詣し、先人の死後を拝見した。

三、父と母

父は福岡県遠賀郡芦屋町宇山鹿柏原部落という半農半漁の土地で生まれた。祖父市松の一人息子で、先祖は代々焼物問屋として千石船で加賀藩に有田焼を納めていた御用商人で戎屋喜兵衛と称し苗字帯刀を許され庄屋を務めたこともあるという。

しかし、祖祖父の代に明治維新となり、焼物屋を続けるも祖父の代に廃業後祖父は満州奉天に渡って商売をしていたという。しかし、父八歳の時死亡し、奉天から引き上げている。母子で随分苦労したが、小倉商業にパスしたことで叔母の家から通っている。途中病気で中退し、健康のため材木商などに務めた後、兵役に取られ除隊後、二十歳で巡査となった。

戦後の昭和廿一年から昭和三十一年まで、警察署長として柳川、八屋、箱崎、東福岡、久留米、八幡、最後は福岡県警刑事部長として戦後混乱期の福岡県の治安維持に務めていた。

五十歳で警視長となり退官した。退職後主として倉庫会社を設立し常務や専務として七十八歳まで務めた。七十七歳で福岡県警友会副会長、八十一歳で同会長を一期務めた。その後町内会の世話役を務めた。八十五歳で敬老の日の行事を世話して帰宅してその夜亡くなった。

母みさをは福岡県前原市の富岡製材所で十二人の兄妹の三番目の子として生まれた。筆者が四歳の時に産後経過が悪く母子共に亡くなっている。筆者はその後母の実家にしばらく預けられたが、その記憶は少しあるが母の記憶はない。写真が二枚残っているだけである。

継母ときは、みさをの末妹が嫁いだ先の夫の妹である。実母の看護を頼まれて来院していた。筆者がなついているのでどうかというところで、実母没後一ヶ月後に結婚している。丁度、第二次世界大戦の始まった昭和十六年で、父は福岡県警察学校の教官をしていた時である。翌年は直方警察署次席に転勤し、次男和也が生まれた。同じ年に福岡県警刑事課次席に転任している。その年に祖母が亡くなり、翌年長女康子が生まれた。翌年の昭和二十年六月大空襲を受け、喜彦は一貴山、和也は鹿家、夫婦と康子は福岡と三箇所に分散した。二十年八月に終戦となり、十月に柳川に転勤、翌年三男和夫が生まれた。翌年八屋に転任四男達夫が生まれた。

継母は父と十二歳年齢が違い二十二歳でいきなり四歳の子供と年とった義母を抱え、その後四人の子供を抱え大変だったと今になっ

て改めて思うことである。

四、生き方について考える

前述のように父が一人っ子で身寄りが少なく、しかも転勤の為の転校や色々な事情での転居で地元との繋がりが少なかったため自分の人生に置ける目標やモデルを立てるのが難しかった。先生や友達、あるいは町の歴史も直ぐ変わってしまい、身近な見本としては父親が主だった。

父から教わったものとして「本来無一物」と言う言葉がある。「人間は生まれた時は裸で生まれ、死ぬ時は何も持って行けないと物欲を戒めていた。また、自分は署長になろうとか考えたことがない、唯その時その時を一所懸命に生きて来たとの話であった。さらに、巡査のころは気も楽で良かったが役職は大変だとの話しも聞かされた。付属中一年の時に父の前任地の署長さんが急死され(奥さんが)、

警察留置所の賄いと下宿をさせているところに父の転勤後、暫く下宿させて貰ったことがあった。また、八屋では警察署の高い所に機関銃が設置されていた。久留米では暴力デモに備えて警察署と署長官舎の内側に拳銃を手にしている警官が一定間隔で配置されている所に学校から帰り戸を開けて入れて貰ったことがある。

母に死に別れた上に父に死に別れたらどうしようかと思った。現に父は祖父と小三で死別しているしと、四人の弟妹のことも考え進路を考えたことがある。

そのような経過で、中学から高校にかけて「人は何の為に生きているのか」とより考えた。

五、動物の生き方から人の生き方を考える

学生時代乳牛は暑熱の中どうして自分の子供を育てる以上に乳をだすのか。鶏はどうし

て卵を生み続けるのか不思議な気がしていた。しかし、原理を追求して行くと「動物の本性」というものがあり、動物は自分の子孫を残す為に懸命に努力していることがわかった。

例えば暑熱のもとでの泌乳能力を知るために分娩末期のマウスを三十三℃の高温環境で飼育すると、子マウスを全部食べてしまう。しかし三十二℃の高温環境では子マウスを育てます。二十日間の泌乳期間に出来るだけ餌の摂取量をへらし、自分の体力を乳に変えて子マウスを育て、生育した子マウスとあまり変わらないぐらいに小さくなってしまふ。餌の摂取量と発熱と微妙な関係に対応しているようである。

また、牛の受精卵移植や顕微受精の研究は親子の關係に人の手を加えることで、思わぬ親子の關係を観察することが出来た。

例えば屠殺した肉牛の雌牛で非常に肉質の

良いものの卵巣から未発達の卵胞をなるべく沢山抽出してシャーレで体外成熟をさせる。

それに肉質の良い雄牛の凍結精液を導入して受精卵を作り、肉質は良くないが繁殖能力は問題のない雌牛に移植して産仔を得る実験に成功した。二十年以上前の研究であるが今や人でもこの技術は応用されている。子宮に病氣を持つ夫人が卵巣から未熟卵胞を採取し人工的に成熟後、夫の精子で受精し、第三者の子宮に移植して子供を産む例である。ところが外国の例ではお腹を貸した母親が子供を渡さない例が出てきて揉めているという。学問的には母体は妊娠するとプロラクチンと言うホルモンが脳下垂体から分泌され分娩後の泌乳に備えて乳腺の発達に関与し、母性本能を高める働きをする。

別の実験では肉用牛の親子を十時間程隔離すると母牛の乳房はぱんぱんに張ってくる。

これに搾乳器をあてて吸引しても百グラムぐらいしか乳が出ない。しかし、子牛を一分程付けて直ぐ隔離して、搾乳器をあてて吸引すると二キロ以上の乳が出る。これは下垂体後葉からオキシトシンと言うホルモンが出て乳腺胞を取囲んでいる筋上皮細胞を収縮させ乳汁を排出する。ところが慣れない搾乳器でいきなり刺激するとアドレナリンが先に分泌され血管を収縮させ脳下垂体からのオキシトシンが目的の器官に届かなくなるためである。

このように母体は置かれた環境に微妙に反応しながら子孫の維持に動いているのである。

六、先祖と孫に会う

今年は大変心に残る年となりそうだ。まず、表題のように二月に満八十歳となり七月で平均寿命まで元気で過ごせたことになる。七月に福岡県遠賀郡芦屋町大字山鹿(柏原)にある無量山善福寺納骨堂落慶式に参加した。こ

こでは今までの先祖や両親の骨を新しい納骨堂に用意された骨壺に入れて安置する作業を行い一族の冥福を祈った。過去帳では二百年前七代前からの本人や配偶者、子供も入れ三十位ほどのお骨が集めてあった。土葬のため黒っぽいものもあった。

ついでに先祖が氏子として崇拝していた狩尾神社跡を初めて見に行った。大和の国岩清水の狩尾神社を勧進したとあるが、天智天皇がここで狩をされたからとの謂れもあるようだ。御祭神は大國主命を始め多くの神があげられている。先祖寄進の鳥居や狛犬もあるようだ。

また、当地は仲哀天皇と神功皇后が九州征伐にやって来られた時にもここ岡の水門で地の熊鱈が出迎えたと日本書紀にあり、昔からの水門(みなど)であったようだ。この山鹿半島の海岸の一部を柏原漁港あるいは海水

浴場といい江戸時代は道行商人の根拠地の一つとして千石船が繋がれていたのであろう。お寺の納骨堂の前にある芦屋町歴史資料館で、千石船の模型など見学後、係りの人に今は鹿兒島に住んでいます。四、五年したら骨になってその納骨堂に来ますので宜しくと挨拶した。

八月のお盆期間を挟んで国分寺市に住む次女一家を訪問した。お盆の初日は来年高校受験の二番目の孫を残して残り一家四人と我々夫婦で高尾山に登った。ロープウェイから降りて山頂付近になると家内が少し息切れたようだった。娘と孫娘が家内の両手を持って引っ張って歩き事なきを得た。

筆者は実母の顔も知らないし、記憶もない。写真が二枚あるきりである。高校三年時に父から怒られた経験がある。自分は継母との間に4人の子供いる。しかし、筆者の母には君

しか居ない。もし君が死ねばお母さんの遺伝子は残らない。それで病死でもしたらと勉強せよとは言なかつた。しかし、このざまでは一度ぐらい死に物狂いで勉強せよということであつた。何となく心に残っている。

次女や孫娘の家内へのサポートを見ていると何となく母の面影もこんなものだったかも知れないと微笑した。長女については当時鹿兒島大学医療技術短大生だった時に父に会つた。君のお母さんはあんな顔だったと言われて往生したことがある。何しろ彼女は筆者にとつて初めての子供で、生まれて直ぐに家内の母乳の出が安定するまで、自分でミルクを産室で飲ませた関係があり何とも母を想像する対象には実感が湧かなかつた。しかし、現在でみていると夫の実家に入り良く義父や義母を支えてきた。三人の子供を持ち、看護婦として働いている。その孫娘も病気の兄を

良く支え、特に働いている母を助けて弟を良く世話している。母の遺伝子は残せたと思う。

七、終わりに

何のために生きているかと言う疑問には子孫を残すためとしか言い様がない。何故なら子孫がなければ、その群は消滅するからである。次にその個体のもつ遺伝子と取り巻く環境の問題がある。

筆者にとつて生き方のモデルは能「花月」物語である。花月少年は七つの時小生の誕生地英彦山で天狗に攫われ、九州、四国、本州の霊山を廻り京都の清水寺で参詣者に寺の由来を語り、舞をまっている。尋ねてきた父親と再会し仏道の修行に共に旅立つと言う話である。修行に終わりはなく父親とは遺伝子であると思っている。

○公儀か私儀（公私の別）を考える

東京都知事選では前知事の公金私的流用が

問題になった。都議選では都民ファーストの会と言うのが圧勝した。当時、舛添前知事の公金や公務の感覚に驚いたことがある。自分の感覚では殆ど私費と考えられる案件だった。大学では本代、旅費、学会での懇親会費等は殆ど自己負担である。舛添氏は法律に違反していないとおっしゃるが「せこい」と世人はここのら感覚を表現していた。都民ファーストの会も私一番とごね得集団の印象で何をやりたいのかさっぱりわからない。都民とはどの集団を指すのだろうか。

米国のトランプ大統領に至っては米国ファーストとおっしゃるが、今までが米国ファーストではなかったのかと思う。TPP交渉をはじめ国際的交渉結果を簡単に破棄し、自分の見解をプログで撒き散らしている。

大切な概念として「公私の別」をどう考えるかと言うことである。何に対しての公儀か

と言うと国、機関、組織などであるが、人類が文化や経済を進めて行く上での単位で、外交や安全保証がつく。

前述の舛添氏の場合は公金の私物化である。小池氏やトランプ氏の場合は通信手段の発達による欲望の私物化である。グローバリズムの一端を示すもので、「私」が優先されると結局無秩序状態になってしまう。小池氏においては知事就任後一年になるのに本来の業績は全然見えてこない。トランプ氏は理念もなく取引と相手の悪口のみである。

○東京裁判史観を脱却出来るか

最近の大きな関心事は大航海時代から続いてきた欧米列強の植民地支配が第二次世界大戦後、七十年余を得て崩壊したと考えられることである。それをもっとも端的に表す事象としては昨年の米国におけるトランプ大統領選出が挙げられる。就任後、日本に米軍駐留

経費を払えとか自動車を輸入せよとか。三十年遅れの要求を突きつけ我々を驚かせた。

米国では貧富の差が大きくなり、銃乱射事件、麻薬中毒事件などが報じられ、社会が二分化している。

さらに最近起こった米国イージス駆逐艦の二度に渉るコンテナ船との衝突事件は常識では考えられない。民間のコンテナ船に撃破されるような軍隊に日本の安全を託すとはどう考えても可笑しいと思う。

また、中国、北朝鮮、韓国も第二次世界大戦後米国を中心に作られた国である。十一号にも述べたが、白村江の戦いで倭国が敗戦し（六六三）、唐の支配を受けるようになり、日本国の誕生（七〇二）で取り敢えず独立し、独自の文化を作るようになった。しかし、天皇の住居を意味する「紫宸殿」と言う言葉は倭国時代太宰府ではあるのに、平安京（七七

九) までは唐朝に遠慮して使われていないと言ふ説がある。この先例でみると米国からの眞の独立は後四十五年かかることになる。まずは憲法改正により自国の軍隊を持ち筆者の推定生存期間八年後、即ち敗戦後八十年ぐらいには制度的にも精神的にも独立したいものである。また、中国、北朝鮮、韓国との付き合いは、時代別世界變動期、白村江の戦い、元朝の來襲時、日清事變前後の状況を再度振り返ってみると良いと思う。

地政学と言ふ言葉が良く使われるようになったが、人間も動物の一種で遺伝子が特に変わる訳でもない。その土地やそこに住み着いた生き様は基本的には変わらないと思う。

○食と性と文化

この場合これを紐解く鍵は如何に「食と性」を確保して子孫を残してきたかに要約されると思う。従つて、有史以来の各国の歴史を良

く理解する必要がある。まず主食であるが我が国の稲作に対して前述の殆どの国が牧畜で命を繋いでいる。我が国は天武天皇や聖武天皇の代に肉食禁止令が出されている。近世には綱吉公時代犬猫の殺生まで禁止されていた。仏教的要素が強いが、神道でも血を忌み嫌う感覚がある。

一方、牧畜は広大な草原の中で地力に応じて羊、ヤギ、牛などを放牧する。また、それを管理する馬も必要である。この基本的体制は時代が変わっても変わることがない。ここで問題になるのは農耕技術と牧畜技術の違いである。従つて、生活の中の習慣や考え方も当然ことなる。例えば稲作では播種、苗植、刈り入れなど季節ごとにポイントを押さえた技術を要する。一方、牧畜では半年は牧野の管理や収穫を行い、他方、一年中家畜の世話をすることになる。そこで、非常に分業が進

んでいる。例えば交配係、搾乳係、分娩係、草地係などその人の技術によって雇用し、自分で育成しようという考えは少ないように感じられる。

今までも論じてきているので此処では軍隊に絞る。此処で入来文書の出番であるが、ヨーロッパと日本の違いである。ヨーロッパでは騎士は王侯の雇用兵であるが日本は武士と農民の信頼のもと一所懸命の仲であり、武士は農場の保護も義務として負っている。

さらに兵站の問題がある。牧畜民族は常に移動をして、生活をしている。その際家族や家畜も同道していることが多い。秀吉の朝鮮出兵や日清戦争、第二次世界大戦と初戦は花々しい戦果を挙げますがその後ジリジリと後退させられるのはこれらの生活様式によると考えている。

中国についてはもう一つの特徴がある。そ

れは食人と言う習慣である。黄文雄氏の見解では中国は町を城壁で囲んで王族から町民までその中で暮らすため、他民族に攻められ籠城し食料が尽きると敵兵から婦女子など弱いものから食べて行くと述べている。日本やヨーロッパでは庶民や下級武士は城下に住み、また、飢饉化しても山の幸や海の幸で命を凌いできた。これらの違いを乗り越えるのはなかなか容易でないと思う。

○有難うとお陰様

最後に言葉の違いで締めてみたい。英語では感謝の気持ちを Thank you. と言うが日本語は相手が無い。現在は有りえない幸運であり、目に見えない陰の方の恩恵と言うことだと思う。お陰様は両親だったり、先生だったり守護神かもしれない。節目の年に感謝し次のフェーズに邁進したい。(完)

(鹿児島大学名誉教授)

編集後記・・・

■第13号という何やら節目の数字になります
が、本誌重慶論客桐野前会長を欠いての出版となりました。2月に永眠されましたが、1月までは車椅子で天文館に足を運ばれるなど最後まで老後の生き方の手本を示されました。行年85歳でした。■庵主重朝氏は今年9月平均余命86歳を越え新次元に入られます。足腰は少し弱りましたが、口と頭は大丈夫のようです。渋谷新会長のもと世界秩序の変革時の今こそ、一回気力をもって更なる6年、18号を目指して頑張りたいものです。■また、本誌創設者貞子さん関連のテーマの種切れを気にしてしましたら、筆者の謡曲仲間榎原宣俊氏の入来文書関連記事を寄稿頂きました。感謝申し上げます。■来年明治維新150周年となり西郷隆盛が多方面から維新の立役者として注目されております。丁度明治維新100年の昭和43年4月鹿児島大学入来牧場が開設されました。同時に入来町役場も新設された時期です。関係したものととして50年余の月日の経過に感無量のものがあります。(中西)

■来年のNHK大河ドラマが「西郷くん」だからと
いつわけではありませんが、西郷隆盛関連記事5

編が収まり、特集号めいた冊子になりました。■今年6月と7月に、念願だった山形県鶴岡市の松ヶ岡開墾場と沖永良部島の南洲翁史跡の訪問を果たしました。西郷隆盛の俗に「征韓論」といわれるものは何だったのか。庄内の地で「南洲翁遺訓」が出版され、後に荘内南洲会が発足さらに南洲神社が建立されて、今なお南洲翁についての勉強が続けられているといった史実あるいは「敬天愛人」の思想などに思いを巡らせながら考えてみると、宮下亮善和尚の書かれている「南洲翁の夢は、道義の普く行われる東亜の和平ではなかったのか」といつたりが理解できるような気がします。■渋谷新会長、中西編集長のもとで、18号を目指して頑張ります。(下土橋)

「炉ばたセイ談」 第13号

炉ばたセイ談会会長 渋谷繁樹

編集担当 中西喜彦・下土橋波

事務局T895-1402

薩摩川内市入来町浦之名130

入来院重朝方

TEL・FAX 0996-44-3586

印刷 新大同印刷株 (0996-30-1811)



平成29年秋

第13号

〒895-1402

薩摩川内市入来町浦之名 130

炉ばたセイ談事務局